注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ　神器なき戦い

【作者名】
坂下ジョゼフ

【あらすじ】
とある事情により悪魔に転生した俺。
神器も持たず平均より少し下という微妙な魔力を抱えて、俺は悪魔として生きていく。
おい木場、てめー顔が近いんだよ。
姫島先輩も近づいてこないでください。
塔城は、まぁいいか。
兵藤は好きに突き進めばいいよ。
ただしグレモリー先輩、てめーは駄目だ。
処女作です。気軽にゆるく楽しんでください。

第1話「かくして俺はやらかした」

入学式を終え、教室を向かう道中。
なんというか……。

「……思ったより、女子が多いな」

俺が入学した高校、私立駒王学園は最近まで女子高だった事もあり、いまだ男子に対して女子の比率が多い。
ちらほら見かける男子生徒は皆一様に居心地悪そうにしている。
なんて言うのだろうか、アウェーというか場違い感というか。女子高に迷い込んだようなこの状態は、どうにも具合が悪い。

「まぁ、時間が経てば慣れるだろ。お、ここか」

1年B組。
俺が割り振られたクラスである。
中に入り、座席を確認して席に着く。席は名前順のようで、「遊佐」が名字である俺は窓際の一番後ろの席だった。
なかなか幸先が良い。
席から周りを見渡すと、クラスの雰囲気はどこか浮ついていた。
入学したばかりだし、当然だろう。これから始まる学園生活への期待や不安。なんだかこそばゆい雰囲気に満ちている。

「……これで、良かったのかもな」

小さく呟く。
俺は高校に進学するかどうかを、かなりギリギリまで迷っていた。

結局、周りの人たちの後押しもあり進学を決めたのだが、心の中ではどこか迷いが残っていた。

だが、それも今さらだ。

せっかく機会に恵まれて、高校生活を送れるのだ。時間が経てばどうせ働くことになるのだから、この三年間くらい楽しもう。

そんなことを考えていると、廊下の方がざわめく。

何事かと思い、そちらに目を向けると、

「すごい」

教室の中で、誰かが呟いた。

おおむね、同感だった。

艶のある金髪に碧みがかった瞳。陶器のような肌に人形のように整った顔立ち。スラリと伸びた背丈に長い脚。

教室中の人間が息を呑むのが聞こえる。

はっきり言おう。

見たことのないような、すごいイケメンが教室に入って来た。

彼は教室の雰囲気に苦笑すると、そのまま歩を進めると座席を確認して席に着いた。俺とは離れた席だ。

しかし、それにしてもすげぇなイケメンって。居る所には居るものだ。

イケメン過ぎて、逆に引くわ。

それからすぐに担任がやってきて、その日は解散となった。

放課後。

俺は体操着に着替え、学園の校庭に居た。

部活動の入部受け入れが始まったのだ。

余談であるが駒王学園では一週間の仮入部期間がもうけられている。

『位置について』

指示に従い、スタートの体勢に付く。

『よーい』

軽く息を吸い、

――――――ッパン！

紙火薬を叩き、スタートピストルが鋭い破裂音を鳴らす。
ほぼ同時に、スターティングブロックを勢いよく蹴り、初めの一歩を踏み出す。
背中を押されかのような加速感。
初速を殺さずに、俺は一歩ごとに加速していく。
何も考えることはない。
ただ、地面を踏みしめ、空気を裂いて、俺は走る。
そうして１００メートルを走りきり、ゴール。

「うわ、速っ！」

タイムを計っていた先輩が驚いていた。
ちなみに女子だ。

「ねぇ！遊佐くん、だっけ？仮入部と言わず入部しちゃいなよ！」

「……まぁ、最初からそのつもりですんで」

適当に答え、スタートの位置に戻る。
我ながら愛想がないが、そういう性格だ。今更なおらない。

俺はいま、陸上部の練習に参加していた。
中学でも部活は陸上部に入っていたし、高校でもそのつもりだ。
正直言うと、放課後はアルバイトで埋めてしまいたかったが、スポーツ特待生として入学したからには仕方がない。
ちなみに特待生になると、授業料は免除である。
でなければ私立なんて通ってなんかいられない。
ここ、駒王学園は留学生を多く受け入れる校風の他に、スポーツなどの部活動にも力を入れているのだ。
実績を持つ生徒は高待遇で迎えてくれる。俺は何度か全国大会に出場したこともあるので誘いがかかった、というわけだ。
校庭は土ではなくゴムトラックだし、中々剛毅な学園である。
それにしても、

「いまどき、なんでブルマなんだ?」

女子の体操着はなぜかブルマが採用されていた。
陸上部はほとんどが女子生徒で構成されている。
すげぇ、目の毒である。
俺は邪な気持ちを払うように、二本目のダッシュへと集中した。

陸上部に入学してから一カ月。
体力測定が行われていた。
面倒臭いことに、１５００メートルの測定までありやがる。
放課後の練習に差しさわるし、適当に流して走ろうと思っていたが、測定をするのは陸上部の顧問だった。てめぇ手を抜くなよと目を光らせている。
信用なさ過ぎてマジで泣ける。

この一カ月で俺の習性は完全にバレていた。
おかしいな、別に普段の練習をサボってるわけでもないのに……。
仕方なく、本気で走ることにする。
あまりわる目立ちしたくないのだが……。
長距離は専門ではないが、やはりヘタな運動部よりは確実に早い自信はある。
俺はため息をひとつこぼしてスタート位置についた。
クラスの男連中と俺を含めて七人で走るようだ。ちなみに一クラスに七人男が居るのは多い方だったりする。

そうして、測定は始まった。

案の定１００メートルも走れば、集団を大きく離していた。
しかし一人だけ、俺の後ろについてくる奴がいたのだ。
軽く目を向け確認すると、そいつは学園の王子様として名をはせている、例のイケメンだった。
髪の毛からキラキラと謎の粒子が発生させながら、余裕の表情でついてきている。

へぇ、面白い。
俺は速度を上げる。

１０００メートルを過ぎても、後ろからの息遣いは離れなかった。
俺はかなり消耗している。
我ながらかなりのオーバーペースだ。
しかし絶対にペースを崩すつもりはない。
運動部なんて皆多かれ少なかれ負けず嫌いだ。
もちろん俺だってそう。
このまま駆け抜けてやる。
中々気配を振りきれないストレスにじっと耐えつつ、ラスト２００

メートルで俺は勝負を仕掛けた。

「ッシ！」

荒く乱れた呼吸の中で鋭く息を吐きだし、スパートをかける。

気配は――――――離れない。

ッ、この野郎……！

そのまま、多少スパートから速度は落としたもののゴールを迎えた。

結果だけ言えば、俺は一位でタイムも自己新記録を大きく更新した。

スパイクも履かずによくやったものだ。

タイムを測定していた顧問も驚いた顔をしている。そしてニヤリと笑った。

ヤバイ。大会で長距離競技にも出場させられそうだ。うちの部活、男子がほとんどいないから出場枠が大量に余っているのだ。

まぁ、良いレースだった。

我ながら改心の出来だ。

唯一、文句があるとすれば、

「やぁ、早いね。やっぱり陸上部にはかなわないよ」

二位となったイケメンが爽やかに笑って話しかけてくる。

息は、切れてすらいない。

「ほざけ、どの口が」

「え？」

気付けば胸倉を掴んで、そいつ引き寄せていた。
周りがざわつくが、そんなのはしらねぇしどうでもいい、すっこんでろ。
「てめぇ、何も思って手を抜いた？ただ面倒だったからか？だとしたらなんで後続の集団にいなかった」
俺は先ほどのレースで、何度か速度の緩急をつけて揺さぶりをかけていた。
本来なら１５００メートルという距離でする駆け引きではないのだが、俺はある考えからそれを行った。
結果は予想通りだった。
奴はただ一度も俺の前に出ようとしなかった。
その意思を見せなった。
コノヤローは俺の速度に合わせてチンタラ走ってくださったのだ。
「あれか？俺は喧嘩を売られたのか？」
別に抜こうと思えばいつでも抜けるけど、まぁ勝たせてあげるよと、そういうことか？
「……すまない」
「あ？」
「君の矜持を傷つけたなら謝罪するよ。よかったらもう一度勝負してくれないか？次は必ず本気を出すと約束する」
ヤローはいつもの胸糞の悪いニヤついた笑顔を引っ込めて、俺をまっすぐに見つめる。
なんだよ、まとも表情つくれるじゃねぇかテメー。

「……ッチ。気が向いたらな。」

俺は奴の胸倉から手を離して、凍りついている周囲を見る。
わる目立ちどころの話しではなかった。
最悪である。

「あ、待って」

教師にとっ捕まる前に逃げようとすると、イケメンが声をかけてきた。
空気読めテメー。

「僕は木場祐斗。同じクラスだし、これからよろしく頼むよ」

「……遊佐薫だ。話しかけんな」

俺の悪態にも爽やかな笑顔を返してくる木場。
くそ、もう余裕を取り戻してやがる。
俺はさっさと教室に戻った。

思えばこれが、これからアホみたいに長い付き合いとなる「木場祐斗」との最初の会話だった。

第2話「ボッチじゃねぇ、誇り高きお一人様だ」

俺の朝は新聞配達から始まる。
早朝というより深夜に近い時間帯から配達を始め、夜闇が薄く明け始めてきた頃に仕事を終える。
他の同僚と違い、バイクの免許など持っていないので配達は基本自分の足を使う。
いちおう自転車も貸し出してもらえるのだが、トレーニングも兼ねて俺は走ることにしている。割と緩い社風なのだ。

寄り合い所に戻ると、配達を終えたオッサン達がくつろいでいた。

「お～う、お疲れ。相変わらず早ぇな」

「うす」

「しかし、良くやるよなぁ。いまどき走って新聞配達とか」

「うすう～す」

「……お前な」

バイト先の俺はこんな感じだ。
安定の無愛想と挑発的な糞生意気。
しかし、ここの連中は人が良いようで俺のそんな態度にも怒ることなく、色々と世話を焼いてくれる。
正直、ありがたい。

「あぁそうだ。薫よぉ、高校はどうだよ。友達できたか？」
「うっせぇし。……まぁ一人はできた」
「うんうん、中々難しいよな。お前は他人に誤解を与えやすいタイプだから、ってええ!?できたのか友達!?」
俺の一言でざわつく寄り合い所。
どんだけ失礼なんだお前ら。全員表出ろや。
「いやお前みたいなひねくれ者に、友達ができるとは。そいつは心が広いんだろうな」
「ぶっとばすぞ、てめぇ」
「ッハハハ。で、どんな奴なんだ？」
「……なんか、むかつくほど爽やかなイケメン。かな？」

駒王学園はその校風と偏差値の高さから、比較的品の良い高校だ。いわゆる不良と呼ばれる人種も少ない。
だから入学早々、学園の王子様の胸倉を掴んでブチ切れた俺は、お嬢様方には刺激が強かったらしい。
あることないこと噂され、気が付けば俺は悪名高い大悪党として校内でその名を轟かせていた。
良く言うと伝統を重んじ、悪く言えば閉鎖的なのだ。
そうして、今日も今日とて、女子たちにヒソヒソと陰口を叩かれる。
俺も俺で、出来の悪い猫をかぶるのはやめて、すでに開き直ってい

た。
だから、無遠慮な目線には無遠慮なメンチを返す。
あん？何見てんだコラ。
全力で目をそらされる。
「遊佐くん、どうして君はそうやって積極的に誤解を広めるかな」
登校してきた木場はカバンを机に置いて、俺の席に近づいてきた。
窓から差し込む光に金糸のような髪が煌めく。そして相変わらず謎のキラキラした光の粒子が散っている。
ねぇ、それどうやってんの？
「俺はこれで良いんだよ」
別段関わって楽しい人間でもないのだ。
「……もったいないなぁ」
俺は木場の言葉に鼻をならした。
あれ以来、何だかんだ言って、俺がこの高校で一番話すのは木場だった。
勝手な理由で勝手にブチ切れられたというのに、木場はなぜか俺によく話しかけてくる。
どうゆう訳か、気にいられたらしい。
最初こそかなり邪険に追い払っていたが、あまりに普通に話しかけてくるものだから、いつのまにか行動を共にするようになっていた。
やはりバイト先のオッサンが言っていた通り、木場の心はかなり広いようだ。
俺だったら、確実に三回は生死をかけた殺し合いをしかけている。
だというのに木場は相変わらず楽しそうに笑って話しかけてくる。

良い奴だ。すげぇ良い奴。
その人気は顔だけが理由じゃないというわけだ。
「そうだ木場。お前、剣道部には入らなかったんだって？」
木場は一度、剣道部に仮入部していた。
剣道なんて中学の頃に授業で少しやっただけの俺でも、木場の竹刀さばきの凄まじさは一目でわかった。
相当鍛えたのだろう。
基礎体力からしてかなりのものだ。
現に新人歓迎の試合では剣道部の部長すら軽くあしらっていた。
「部長さん、嘆いてたぜ。期待の新人を取り逃がしたってさ」
「……そっか、悪いことしちゃったな。僕はもともと剣道部には入らないつもりだったんだよ」
「んだよそれ。冷やかしか？」
「いや、腕がなまらないように時々練習には参加したくてね、その挨拶さ。それに僕が修めるのは剣道じゃなくて剣術だから」
「ふ～ん。で、結局なにか部活には入ったのか？」
「うん。オカルト研究部に」
「……ハァ？」
え、待って待って。もしかして俺にかまってるのって、変な邪教への勧誘が目的だったりする？

「知り合いが部長をしててね。その縁で誘われたんだ」

「はぁん。うさんくせぇな」

木場は俺の反応に苦笑で返した。

そんなどうでも良いような雑談を積み重ねていると、予鈴が鳴った。

木場は席に戻り、担任がやってくる。

さぁ、今日も勉学に励みますか。

放課後。

部活を終えて、古いアパートの一室に帰る頃には、すでに日が落ちかけていた。

痛んだ畳を夕日が照らしている。

なんでか、とても落ち着かない。

引っ越してきたばかりだが、俺はこの部屋が嫌いだった。

苛立ちばかりがつのっていくのを感じた。

「……あぁ、そうか。この部屋、お袋と住んでた部屋に似てるんだ」

殺風景な、生活感のかけた風景。

西日を受けて、ただ一人で時間を過ごす。

静寂の音が耳に痛く、無性に過去を思い出させた。

「くそ！」

俺は衝動的に壁を殴っていた。

『うっせぇぞ！』

隣室の住人が壁を叩き返してくる。
上等だテメー。
「やんのかよオラー!!」
より強く、壁を殴る。
『ご、ごめんなさい!!』
その声を聞いて、すぐにクールダウンする。
やってしまった。何をしているんだ俺は。
八つ当たりなどみっともない。今度菓子折りでも持っていこう。
一人反省をしていると、電話がかかってくる。
「はい、もしもし」
『あ、薫ちゃん？皆本です、元気してる』
「あ、どうもご無沙汰っす」
相手は施設の園長先生だった。
穏やかに笑う俺達のお婆ちゃん。俺が反感を抱かない、数少ない「保護者」という立場の人間だ。
『そっちでの生活は慣れた？お隣に喧嘩売ったりしてない？』
エスパーかアンタわ。
『高校ではお友達はできた？』

「あぁ、まぁ一人だけ」

『そうね、まだ大丈夫よ。一年で駄目でも二年目だってあるし自分のペースで、って、えぇ!?できたのお友達!?』

「……」

なんなの？打ち合わせでもして俺を苛めているの？

ああ、もう何も言うまいさ。ええそうですよ、友達もまともに作れないボッチですよ。それが何かっ!!

先生は電話の向こうで嬉しそうに笑った。

『そう。良かった。あなたは少しかたくなだから。お友達、大切にするのよ』

「……はい」

『それじゃ、子供たちに変わるわね』

「うえ、良いですよめんどくさい」

『またそんなこと言って、『ねぇ～変わってぇ!!』あぁ、はいはい、すぐ変わるわよもう』

ガキどもがごねる声が聞こえ、電話の相手が変わる。

『薫にーちゃん、やっとトモダチできたんかぁ!!』

「ぶっとばすぞクソガキがっ!!」

気が付くと、感じていた空虚さはどこかへいっていた。
なんだ。
ようするに俺は、寂しかっただけなのだ。
なんともダセェ話しである。

次の日の学校。

「おう、飯食うぞ木場」

昼休み、そう木場に話しかけると何やら驚かれた。

「んだよ？」

「いや、珍しいね。遊佐くんから誘ってくれるなんて。何かあったのかい？」

「……別に、なんとなくだよ。ほら行くぞ」

木場が温かい目を俺に向ける。
居心地が悪く、さっさと教室から出た。
目指すは安くて美味い我が校の学食である。

「こらー！待ちなさいエロ兵藤ー!!」

そんな声が聞こえたかと思うと、廊下の角から一人の男子生徒が勢いよく、飛び出してきた。

「危ないっ」

後ろで木場が叫んだ。
このままでは俺とぶつかる。
俺は反射的に、突っ込んできた男子生徒に前蹴りを喰らわしていた。

「ぐぅえあ!!」

鈍い悲鳴を上げて男子生徒はすっ飛んで行く。
廊下の空気が凍った。
え？なにこれ俺が悪いの？
男子生徒を追いかけていたらしい女子生徒たちが、判決を待つ罪人みたいな顔で俺を見つめていた。

「……はぁ。廊下は走るな。以上だ、行って良いぞ」

「「はい！ご指導ありがとうございました!!」」

女子たちは去っていった。

「なんなんだいったい？」

「さぁ？それより怪我はないかい遊佐くん」

「あぁ。どちらかというと、ぶつかってきた奴の方がやばいと思う」

目を向けると男子生徒は寝転がったまま、女子生徒のスカートをローアングルから覗いていた。
うん。なんか、大丈夫そうだね。

ちなみにこれが、俺と「兵藤一誠」の初めての接触だった。俺はすっかり忘れていたが、兵藤は憶えていたようで、会うたびにしばらく怯えられる事となる。

まぁ、そんな感じで俺の高校生活は過ぎていった。
朝は新聞配達、学校では木場とだべり、放課後は陸上部で汗を流す。休みの日には工事現場に顔を出し、たまに木場と出かけたりする。
わりと忙しい毎日が続いていて、難しいことを考える暇はなくなった。
それでも、貯金に余裕が出てくると、心にも余裕がでてきた。
現金な話しである（貯金だけに）。

こんな生活も悪くない。
そうだ、まるで無条件に青春を謳歌する、どこにでもいる高校生のようではないか。
そんなふうに、自分の日常を受け入れ始めた頃、
唐突に、俺の人生は終わりを告げた。

剥き出しのコンクリートに叩きつけられた俺は、朦朧とした意識でそれを眺める。
少し離れた場所には、俺の身体から千切れ落ちた、足が転がっていた。
あぁ、どうしようか。
これではもう、走れない。
特待生の待遇も打ち切られるから、高校は中退することになりそうだ。
木場になんて説明しようか。

そんな、どうでも良いことばかりが頭によぎった。

「キ、キヒッ！ヒヘェアヒヒヒャ!!!!」

下卑た笑い声が聞こえ、強い力に身体を持ちあげられる。

そうして俺は、心臓を貫かれて――――――死亡した。

第3話「俺を救え」

その日は、臨時で朝会が行われた。
体育館に集められ、何事かと思っていたら祐斗が説明してくれた。
どうやらみんなある程度は事情を察しているらしい。
俺はそういった情報には、どうにも疎かった。

「いまこの街では学生の失踪事件が相ついでいてね、事件性が認められたから学校側も警戒しているのさ」

事件が始まったのは一か月前。
近隣の高校の女子生徒が失踪した。
最初はありきたりな家出騒ぎだったが、二人目、三人目と学生の捜索願が立て続けに出され、事件性を帯びていく。
そうして六人目の失踪者の持ちものが血濡れで発見され、晴れて事件は表沙汰になった。
警察は一連の失踪事件を同一犯の犯行と視ているようで、近隣高校に強く警戒を呼び掛けている、らしい。

「はぁん。全然知らなかった。物騒な話しだな」

「まったくだよ。本当に――――――やってくれる」

木場の呟きを聞いた途端に、ぞくりと身体が震えた。

「お前さ、日常会話で殺気をおり混ぜるのやめてくれる？」

「え？ああ、ごめんね、驚かせちゃったかな？」

「べ、別に驚いてねぇし、全然余裕だからもう全然」

木場はクスクスと笑い、俺はイライラとした。

そうこうしていると朝礼は始まった。内容は木場が教えてくれた情報と対して変わらない。

最後に校長が注意を促し、朝礼は締めくくられた。

壇上に立っていた、副会長の支取蒼那とかいう女が、やけに険しい顔をしていた事が印象的だった。

昼休み。

俺と木場はいつも通り、食堂で飯を食っていた。

周りの生徒たちは話題の失踪事件の話しで盛り上がっている。その口調に緊張感はない。所詮は対岸の火事だ。

俺だって、今日知ったからでもあるが、いまいち現実味を感じられずにいた。

「遊佐くん。放課後の予定は？」

「ん？多分すぐに帰るぞ。部活動はしばらく活動停止だっていうし」

「うん。それが良いよ。よかったら家まで送ろうか？」

「……それはギャグか？」

木場は苦笑する。

「割と本気なんだけど。とにかく気をつけて帰ってね」

「といっても、何に気をつければいいのやら。……駄目だ食いきれん。

パス」

木場に半分ほど残った丼を渡す。よく以外だと言われるが俺は小食である。少ない飯を噛みしめるように食べていた頃の名残だろう。

逆に木場のほうがよく食べるので、食いきれないものは木場にまわしていた。

「あら、本当に仲が良いのね」

そんな俺達に声がかかる。

顔を上げると、紅い髪の女性が立っていた。

気持ち悪いほど美人だった。

手に持ったトレーにはパスタが乗せられている。どうでも良いが、俺は学食でパスタを頼む人間を信用しない。

「遊佐くん。こちらはリアス・グレモリー先輩。僕が所属しているオカ研の部長だ」

「こんにちは。一緒してもいいかしら」

「……席は空いてんだ、好きにすれば？」

「すいません、部長。彼は人見知りで。初対面の人間にはどう接していいかわからず、とりあえず悪態をつく癖があるんです」

「やめろ木場。見透かすな、俺の人間性を見透かすな」

「大丈夫よ、祐斗。ふふ、可愛らしいものじゃない」

俺は反射的に頭を掻き毟る。

なんだろうこの女、すげぇ苛々する。

「遊佐薫くん。祐斗から話しは聞いているわ。うちの祐斗がお世話になっているみたいね」

「傲慢なもの言いだな。なに？あんたら親類？」

「それに近しいかしら」

「へぇ。で、何か用ですか？」

グレモリー先輩は懐から手の平サイズの四角い紙を取り出し、差し出してきた。紙には魔方陣とでも言うのだろうか、幾何学的な模様が描かれている。ご丁寧に「あなたの願いを叶えます」の文字まで書いてあった。

俺はなんとも言えないような気持ちを味わう。

「え～と、俺、無神論者なんで」

「私だってそうよ？って、そうじゃなくて、べつに宗教の勧誘じゃないわ。これは……そうね、ちょっとしたお守りよ」

「いや、いらないッス」

即答する。

「あなたに襲いかかるかもしれない理不尽を打ち砕くものよ？」

「説明すればするほど胡散臭ぇんだよ。いやマジでいらないんで。後から料金を請求されても困るんで」

「遊佐くん。騙されたと思って受け取ってくれないか？」

「おい、木場テメーやっぱ邪教のまわしもんか？騙されたら洒落にならねぇんだよ。どうしていつも富裕層ってのは貧困層から金を巻き上げようとするのかね。ない袖は振れないんですよチクショー！」

なんかもう、グダグダである。

結局、俺はそのお守り？を受け取らされてその場はお開きとなった。

ちくしょうマジで捨ててやろうか、とか考えていたが木場があまりに真面目に説得してくるので仕方なくポケットに突っ込んだのだった。

放課後。

木場に言われたとおり、寄り道せずに自宅へ向かう。

正直、冷蔵庫の中が寂しいことになっているのだが、まぁ仕方あるまい。カップ麺くらいはあった筈だ。

「しかし、木場のやつ……」

いつも変だが、今日は際立って様子がおかしかった。

俺に帰宅をうながす声には真に迫るものがあり、その忠告は教師の間延びしたものよりもずっと実感が含まれていた。

木場は間違いなく、事件に関して何かを掴んでいる。

「大丈夫。今日で全部終わる。……終わらせるよ」

今日の別れ際。

思いつめたあいつの呟きが、耳に残った。

自宅であるボロアパートが見えた時には、思わず安堵のため息が漏れた。自分でも知らぬうちに、張りつめていたのかもしれない。
散々、木場が脅しやがったせいだ、あのヤローめ。

「あの、もし？」

ビクリと身体が震えるのを感じた。

振り向くと、そこにはひどく痩せた若い女性が立っていた。顔を苦痛に歪ませており、心臓の辺りを強く押さえている。
その姿は弱々しく、今にも倒れてしまいそうだった。

俺はなんだか無性に恥ずかしくなった。
さっきから神経がいやに過敏になっている。

気を取り直して、女性の方へ歩みを進める。

「大丈夫でしょうか、なにかの持病ですか？」

「えぇ、心臓が少し、くる、苦しくて――――」

心臓か、早く救急車呼んだ方がいいな。
俺は携帯電話を持っていない。だから近隣の住人に電話してもらおうと、目に付いた家のベルを鳴らす。
応答はない。留守のようだ。
思わず舌打ちが漏れる。
俺が家まで電話しに行った方が早いか？

「あの、すいません。すぐ戻りますんで、」

「――――だから、ね。あなたの心臓、ちょうだァあい」

「は？」

地獄の釜が、開く。

さっきから何かうるせぇと思っていたら、自分の呼吸音だった。
フォームも何も滅茶苦茶で、たいした距離も走ってないのに馬鹿みたいに息が切れている。肩口から滴る生温かい感触がひたすらに不快だった。

「ハァ……ッ、くっそ、まじ痛ってぇな!!」

俺はひたすら走っていた。いや逃げていた。
あの忌々しい糞女からだ。

女は突然襲い掛かってきた。
いつかのように反射的に前蹴りで迎撃したが、吹き飛んだのは俺の方だった。まるで走ってくる車に弾き飛ばされたような感覚。足には鈍い痛みが残った。
ありえない。女はどう見ても俺よりも小柄だ、体重差がだってある。

「ッグ！」

気付くと肩の肉が抉られていた。
刃物なんて持っていなかった筈だ。
すべてが理解の外にあるのと自覚した。
恐怖に呼吸が乱れるのを感じた途端、俺はたまらずにその場から逃

げだした。

そうして、鬼ごっこが始まったのだ。

異変にはすぐに気付いた。

どんなに走っても、人の姿が見えないのだ。

別にここらは人通りが少ないわけじゃない。

交通量だってそれなりのはずなんだ。

混乱した頭は、もう使いものにならなかった。

気が付けば、知らない道を走っていた。そもそも俺は引っ越してきたばかりで、たいして土地勘などないのだ。

「漫画みたいな、袋小路は、かんべんな」

気配はいまだ振りきれていない。

奴がすぐ後ろに迫っている気がして、後ろを振り向く事が出来なかった。ただひたすらに足を動かす。

キヒヒヒャハァヒヒヒ!!

笑い声が聞こえる。

発信源からは距離があるように感じた。

唇を噛む。いたぶられているのが自覚できた。

舐めやがって。

瞬間的に意識が苛烈し、激しい怒りを覚える。

このままじゃ、ただ体力を消費するだけだ。

だったら、覚悟を決めてやる。

俺は目についた廃ビルに飛び込んだ。
剥き出しのコンクリートで固められたその空間は肌に冷たく、熱を帯びた身体にはちょうど良かった。
壁を背にして、糞女を待ち構える。

視線は出入り口に釘付けで、

周囲の異様な静けさが、息苦しい。

まだか？

心臓の鼓動ばかりが激しく高鳴り、

まだなのか？

乱れた呼吸は一向に戻らない。

頼むから、

冷えた汗がじっとりと張り付く。

早くっ

ここは寂しい所だ。
あぁ。夕焼けの記憶が、心を蝕む。

「――――――――――――――――――――ッ!!!!!」

俺は、衝動のままに音にもなっていない叫び声を上げた。

頼むから早く、かかってこいよ!!!

来て欲しくない筈なのに、来て欲しい。
頭がおかしくなりそうだった。

そして、どれくらいの時間が過ぎたか、もう何もわからなくなった頃、

――――――ズルリ。

音がした。
呼吸が止まる。
俺以外の生き物の音。
今までの時間を否定するかのように、
そいつは姿を現した。

それを確認した瞬間。
自分でも驚くような速度で現れたそいつに躍りかかる。
手には重量感のあるコンクリート片。

それを糞女の頭部めがけて、俺は――――――、

コマ送りのような視界の中で、女と目が合う。

「シィィィィィィィィィィ」

笑っていた。女は笑っている！
ッ！だからなんだ、構うものか!!

――――――振り抜いた。

ゴッ。

鈍い音。我ながら改心の一撃。
コンクリート片は粉々に砕け、糞女の頭部をも打ち砕いた。
いや、違う。

「な、なんだ？」

間抜けな自分の声。
確かに、女の頭部は割れていた。パックリと真ん中から。
断面に乱杭歯を蠢かせて、
割れていた。

血が吹き出る。
奴のものではない。女は無傷だ。
では誰の？
ここには、他に誰が居る？

俺だ。
俺しか、いないのだ。

コンクリート片を振り切った右腕を見る。

「ア、　アァ!!アァアァアァアァアァアァアァ!!!!!」

俺の右腕には手首から先が、無くなっていた。

俺は、転がるように逃げ出す。
廃ビルの、上へ、上へ。自ら退路をなくしていることにも気付かずに。

「くそ、くそッ！あいつ、チクショウ、あの女っ!!……喰ってやがった、俺の、腕を！」

俺の腕を咀嚼する、奴の頭部を思い出す。
堪らず、その場で嘔吐する。

千切れた腕からは、アホみたいに血が吹き出ていた。どういう訳か痛みはさほどない。というより、全体的に身体の感覚が無くなってきた。

どうやら気が狂う前よりも先に、出血多量でくたばる方は早そうだ。
光の速さで襲い来る眠気。
あらがう気力など残っていない。

ふいに、ポケットから赤い光が漏れているのに気が付いた。

「……な、んだ？」

最後くらい疑問を残したくないと、残った左腕でなんとかポケットをまさぐる。
出てきたのは、グレモリー先輩に渡された一枚の紙だった。
描かれた魔方陣がいまは紅く発光している。

「あな、たの願い、を、かなえ、ます」

紙に書かれた、イケすかねぇ文言。
俺がいま願う望みはなんだろう。
安らかな眠り？
違う。
怪我の治療？
アホか。
……んじゃ、あの糞女をぶっとばす？

頭が回ってきたじゃねぇか。
だけどそれは、こんなよくわかんねぇ紙切れに願うことか？
この紙の魔方陣から、強大な力を持った愉快なお友達が現れて、俺の代わりにあの糞女を消し墨にするってか。
それとも伝説の、それこそ神をもブッ殺すような武器が召喚されてきて、俺はその謎パワーをもって糞女を打倒するとか。
ッハ。笑えるわ。
まじで笑える。ここ数年分は笑える展開だわ。
だけど、まぁ、うん。
それだけは絶対に断る。

「ちげぇよ。それは違ぇんだよ！俺がっ、俺がやらなきゃ意味がねぇ！」

そうだ、何を寝ぼけてたんだ俺はっ!!

「振って湧いた奇跡なんざ俺はいらねぇ！ご都合主義なんて糞喰らえだっつーの!!」

ラッキーで与えられる力なんて俺はごめんだ。
そうさ、ずっと昔から俺は知っているんだ。

「俺を救えるのは、俺だけだっ!!!」

手の中の紙きれを握りつぶし、根性で立ち上がると、思いっきり踏みにじってやる。
制服の上着を脱いで、手首から先を失った右腕にグルグルと巻きつける。最後にズボンのベルトで上から固定し、完成。
まぁ、これで多少は防御力アップだ。

「お、ナイスタイミングだぜ、糞女……！」

女は再び俺の前に現れた。
相変わらず割れた頭からは乱杭歯が覗いている。他にも腕に裂け目が入り、同じように物騒な歯が突き出ている。
なまじ、それ以外は人間の形を保っている分だけ気色悪かった。

「なんだよ、やる気満々じゃねーかテメー」

「ゲェアキャアアァアアィアィアァ!!!」

「上等だぁ！来やがれっ!!」

猛禽じみた早さで襲いかかってくる糞女。
俺は避けずに向かい打つ。

「文字通りぃ、こいつを喰らえぇええ!!」

俺は衣服に包まれたポンコツの右腕を奴の頭に叩き込む。
相変わらず食いしん坊な頭のようで、ガッツリと喰いついてくる。
俺はなんとか糞女を壁際まで押し切り、絶賛咀嚼され中の右腕を振るう。

「くたばぁあれやぁあああ!!!」

何度も何度も、力の限り、糞女の頭を壁に叩きつける。
何度も
何度も
何度も
何度も
何度も
何度も。

ゴキリ。

音がする。

俺の右腕が二の腕まで食いちぎられた音だ。

「ッハハハ」

笑えるほど、理不尽な話しである。

俺は構わず、奴の頭を壁に叩きつけ続ける。

異変が起こる。

最初は俺の血が、奴の頭にある裂け目から漏れ出ているのかと思ったが、どうやら違うらしい。

獣臭い血の匂い。

奴の血の匂いだ。

俄然やる気が出るぜぇあ。

一度大きく引きつけ、渾身の力で奴の頭を壁に叩きつけた。

そして奴の両腕の歯が俺の左足を太腿の半ばから断ち切った。身体を支えていたものが片方なくなり、俺はバランスを崩す。

奴はその片手の歯を俺の腹に喰い込ませると、ゴミクズのように俺の身体を投げ飛ばした。

面白いように転がる身体。

なんだか、ゴキゴキッと景気の良い音が身体から聞こえた。

まぁ、どこかしらの骨が折れたのだろう。

いまさらな話しである。

どちらかというと、頭を打ったことの方が致命的だった。

あぁ、

意識が、
混濁する。
あれ？
なんだろあれ？
見慣れたものが向こうに転がっている。

剥き出しのコンクリートに叩きつけられた俺は、
朦朧とした意識でそれを眺める。
少し離れた場所には、俺の身体から千切れ落ちた、
足が転がっていた。
あぁ、どうしようか。
これではもう、走れない。
特待生の待遇も打ち切られるから、高校は中退することになりそうだ。
木場になんて説明しようか。
そんな、どうでも良いことばかりが頭によぎった。

「キ、キヒッ！ヒヘェアヒヒヒャ!!!!」

下卑た笑い声が聞こえ、強い力に身体を持ちあげられる。

くそが、勝ち誇りやがって。
なんだよ？どう殺してくれるつもりだよ。

「あ」

待て。
あいつは、あの糞女は最初、俺になんと言っていた？
ほら、思い出せって。
アレだよアレ。

『――――だから、ね。あなたの心臓、ちょうだァあい』

そうだ、これだ、間違いない。
奴の執着が、俺の最後の勝ち目だっ!!

奴は左腕で俺を吊り上げ、右腕を細く細く引き絞っている。
案の定、心臓に狙いを定めているのだ。
まったく、最高の距離感だぜ。
俺は残った左腕で、奴の頭を掴む。勿論、乱杭歯が喰い込むが、やっぱりいまさらだった。左腕を頼りに、最後の力を振り絞り、俺の身体を奴に近づける。

「まったくよぉ、人の身体をバクバクバク喰い散らかしやがって」

俺は限界まで口を開き、

「不公平じゃねぇか」

だから、俺にも喰わせろよ。

俺は、奴の首筋に喰らいついた。
ブチリと犬歯が弾力のあるものを引き千切る。

そして、俺の心臓は、奴に貫かれた。

投げ出される俺の身体。
霞んだ視界には、糞女が首から血を噴き出し、もがいているのが見えた。

「……ッ、ハ、ハハ。ざまぁ」

一矢報いてやったぜ。
性能差の割に頑張っただろう？

そうして、俺の意識は静かに途絶え、

「遊佐くんっ!?」

あ、誰だてめぇ？

第４話「あとで聞いて『ふ～ん』ってなった裏話」

木場祐斗は悪魔である。
自らの欲に従い生き、人間に契約を持ちかけ、蝙蝠の翼を生やす。聖なるものが弱点で、日の光もあまり好まない。
寿命だって、人間と比べるのが馬鹿らしくなるほど長い。生命力や身体能力もケタ違いだ。
そういう、生き物なのである。

だから祐斗は、自分には人間の友人などできないと思っていた。

もともと祐斗は人間だったが、とある理由で悪魔へと転生した。
悪魔の中でも名高い『グレモリー家』の家次期当主、リアス・グレモリーの「騎士」。それが祐斗の立場だった。
悪魔としての生活は思ったよりも文化的で人道的だった。少なくとも祐斗の「人間」としての人生よりも確実に上等なものだった。
人間の社会の中にひっそり紛れ込み、うまく共存することを望む。
それが現在の悪魔の基本姿勢である。
だから、祐斗は特に負い目を感じるようなことは何もしていない。むしろ健全とすらいえる生活を送っている。

それでも、大きな隠し事をしている自分に、友人をつくる資格があるのだろうかと、そう思ってしまうのだ。
祐斗は糞真面目であった。
リアスの勧めに従い駒王学園に進学したが、きっと今まで通り、浅い人付き合いで周りの目を誤魔化すのだろうな、などと考えていた。
そんな祐斗に転機が訪れたのは、入学してすぐに行われた体力測定

だった。
悪魔の自分が本気を出しては大騒ぎになる。祐斗はうまく加減をしながら測定を行った。
そして１５００メートル走の測定で、祐斗は生涯の友と出会う事になる。

最初の印象は特に強いものではなかった。
クラスにいる少ない男子の一人。その程度の認識だった。

測定は始まり、男子の集団は走りだす。
彼はすぐに集団から特出した。
そのフォームには無理がなく、走り慣れた人間特有の美しさがあった。
祐斗は気付けば、彼の後ろについて走っていた。
速い。
素直に舌を巻いた。よく鍛えている。

……それでも、自分が本気を出して勝てない相手じゃない。

思えば、祐斗が感じていたのは、虚しさだったのかもしれない。
人間としての人生に未練はない。しかし自分が彼らとは違う存在だという認識は、呑みこむには少し苦かった。

そうして、レースは終わった。
ただ一度も、祐斗は彼の前に出る意思を見せなかった。

祐斗は彼をあらためて見た。
平均よりも高い背丈に、痩せているが角ばった筋肉質な体型。さっぱりと切った短髪によく焼けた肌。顔つきは鋭利だが、頬に僅かに散ったそばかすが少し子供っぽくて親しみが持てる。

そんな彼は、測定で本気を出しきったのだろう。荒れた息を吐き出し、額から落ちる汗を受け入れていた。

その姿が祐斗には、ひどく眩しかった。

『やぁ、早いね。やっぱり陸上部にはかなわないよ』

気付けば祐斗は、彼に話しかけていた。

返答は手荒かった。

彼は自然な動作で木場の胸倉を掴んで引き寄せた。

祐斗は反射的に周りの反応をうかがうと、案の定ざわついている。しかし彼はそんなこと眼中にないと言わんばかりに木場だけを睨んでいる。

普段は気だるげな彼の目が、烈火の感情を浮かべて祐斗を射抜く。

祐斗の欺瞞と慢心は、すべて彼に見抜かれていたのだ。

『僕は木場祐斗。同じクラスだし、これからよろしく頼むよ』

『……遊佐薫だ。話しかけんな』

二人はこうして出会った。

木場祐斗は、遊佐薫と友達になることを望んだ。

それから祐斗は薫に話しかけ続けたが、薫は呆れるほど愛想が悪かった。

自分が嫌われているせいかとも思ったが、見ていると薫は誰に対しても無愛想だった。時には教師にも平気で悪態を吐く。

いつも通りキツイ言葉で追い返された祐斗は苦笑していた。

そして薫の探るような目線に気がついた。

観察されている？

いや違う。

試されているのか？

そこまで考えが至ると、後は早かった。

薫は悪態を吐いた後、いつも相手の事をジッと見つめる。

良い意味でも悪い意味でも、薫は剥き出しの人間なのだ。無愛想なのも口が悪いのも、全部が素の薫だった。

それに耐えられない人間なら、最初から薫は近づけようとしない。

なんとも直球勝負。

呆れるほどのコミュ症具合、というか不器用さだった。

それに気づいた祐斗は、その野生の獣じみた青年をただ受け入れた。

薫はそういう人間なのだと思って接していると、悪態も気にならなくなった。そもそも言葉はキツイが彼の言葉には悪意はないのだ。

そうしていると、いつしか探るような目線は感じなくなり、よく一緒に行動するようになっていた。

懐に入るとよくわかるのだが、薫はやる気なさげに見えて、かなり激しい人間だ。

祐斗は絶対に許せないもの以外はわりと流してしまえるし、激しない性格だが、薫は違う。

薫は大抵のことは許せないし、何やらいつも怒っている。

二人が一緒に出かけた時に、こんな事があった。

レジで支払いにまごつく老人を、後ろに並んでいる中年が責め立てていた。

祐斗はそれを見てただ眉をひそめただけだったが、薫はごく自然な動作で中年を蹴り飛ばした。
その時、祐斗は慌てて薫を取り押さえ、手を引いてその場を走り抜けた。
薫は中年につまらないような、怒っているような、複雑な表情を向けていた。

薫の行動はいつも正しくない。
だけどいつだって、間違ってはいないのだ。

祐斗は薫の友達であり続けた。

朝会が終わり、リアス・グレモリーと支取蒼那、いや、リアスと同じく爵位をもつ上級悪魔「ソーナ・シトリー」は旧校舎のオカルト研究部に集まっていた。
どちらも美しい面差しの少女だったが、今はその表情は険しく歪ませていた。
リアス・グレモリーはここら一帯の土地を管理する悪魔だった。
そのグレモリーの領地で無益な血を撒き散らす無法者がいる。
それは、どこからか流れてきた「はぐれ悪魔」だった。

現在、悪魔の絶対数は劇的に減っている。
先に起こった大戦による傷跡であった。
事態を重く見た悪魔の陣営は、人間を悪魔に転生させることを可能とする「悪魔の駒」というシステムを産み出す。

主となる上級悪魔がチェスの駒に見立てて下僕を持ち、少数精鋭の部隊をつくる意味もあるこの制度。

優秀な「駒」は主のステータスになった。
一時期、悪魔たちは人材発掘に夢中になったが、予想外の弊害もあった。

転生したといっても、悪魔としての生活に馴染めない者や、突然に降って湧いた力に溺れて欲に身を任せるものがいた。
厄介なのは無論、後者だ。
しまいには自らの主から逃げ出すものや、殺してまで自由を求める者まで現れた。

それが「はぐれ悪魔」という存在だった。

はぐれ悪魔は大概が人から離れた醜い姿をしている。
自分を律することもできない心の内が、姿となって表れるのだ。
まさしく怪物というわけだ。
精神的にも変異をとげて、まともな理性も無くなる。そうなると手がつけられない。
このグレモリー領に迷い込んだのも、どうやらそういったはぐれ悪魔のようだった。

「私が独自に調べたところ、被害者は警察の発表の倍はいるでしょう」

ソーナは重い口を開く。
ブチリと、噛みしめ過ぎたリアスの唇が切れる。
その髪と同じ色を持つ液体が口を伝う。
リアスの心中は怒りの業火が燃え盛っていた。そのような被害を出したはぐれ悪魔への怒りは当然ある。被害者の無念を思うとやり切れない。
しかし何よりもリアスの心を占めていたのは、自分への激しい失望だった。

この土地を管理していたのは誰だ？
私だ。このような事件、私が未然に防がなければならなかった。

リアスは誰よりも自分に厳しい少女だった。
貴族たるもの、そうあるべきだ。そう彼女は考える。

「リアス、あまり自分を責める必要はないわ。流れのはぐれ悪魔は天災と一緒です」

「人は、天災も予測してみせるわ。わからないのは悪魔の暴走なんて埒外の事象だけよ」

ソーナはリアスの言い分に口を閉じる。
この友人がどういう性質なのかはよく分かっている。どれだけ言葉を重ねても自分を責めるだろう。
それならば、いまの自分にできることを。

ソーナもまた、聡明な少女だった。

自分が調べたはぐれ悪魔の情報をリアスに伝える。

「はぐれ悪魔の通称は、心臓喰い（ハートイーター）。心臓に病を負って死亡し、悪魔として転生した元『戦車』の女悪魔よ。主の元から逃げ出したみたい」

「心臓喰い？」

「彼女は若い健康な人間の心臓を身体に取り入れることで、自分は強くなれると信仰しているようなの」

「歪んでいるわね」

「ええ。ただ、はぐれ悪魔ってそういうものだから」
「そうね。それが学生ばかりが狙われる理由……」
リアスは呟くと、力の満ちた表情で顔を上げた。
「どちらにせよ、報いは受けさせるわ……！」
その瞳には炎が宿っていた。

放課後、リアスの使い魔が「心臓喰い」を捕捉する。
現場に急行しようとするリアス達だが、思わぬ邪魔が入る。人間界に逗留するリアス等に細かい指示を出す『大公』から、待ったが掛かったのだ。
そのあまりの理由にリアスは激怒した。

リアスの『グレモリー家』、ソーナの『シトリー家』は共に悪魔の名門である、旧72柱に名を連ねている。
その72柱も、先の大戦で半分以上が血筋を断絶させていた。だからこそ残った一族はその希少性から名を高めてもいた。
そして「心臓喰い」の主は72柱が一柱『プールソン家』の嫡男の下僕であった。
そのプールソン家が「心臓喰い」は自分達の家の者で捕まえると言ってきているらしい。ようするに〝お気に入り〟を壊されたくないのだ。

当然、リアスは突っぱねた。
冥界の辺境に住むプールソン家が人間界へ到着するまでに、いったいどれくらいの時間が掛かるのか。

事態は急を要するのだ。

しかし、ヘタに「心臓喰い」に手を出せば、グレモリーの名に傷がつくかもしれないとまで告げられるとリアスは何も言えない。

家の名は出されると、次期当主でしかないリアスは口を閉ざすしかない。

リアスにとってグレモリーの名前は誇りだが、何よりも重い足枷でもあった。

結局リアスは、殺さずに捕獲することを確約して、「心臓喰い」のもとへ転移した。

それは、痛恨の時間的ロスだった。

転移してきたリアス達を迎えたのは、衝撃の光景だった。

件の「心臓喰いは」その首から血を噴き出し、もがいていた。頸動脈辺りの肉がごっそりと削げている。

これは元人間の転生悪魔に該当することだが、彼らは人間の頃の急所がいまだに残っている場合がある。

「心臓喰い」はその傾向が強いようだ。首元の傷に再生の兆候が見られない。

いったい、誰がと辺りを見回すと「心臓喰い」の足元には血だらけの青年が倒れていた。リアスは、見たことのある子だと思った。

祐斗はすぐに、それが誰かを確信した。

「遊佐くんっ!?」

その声はほとんど悲鳴だった。
遊佐薫。
それは祐斗が高校でつくった、初めての友人だった。

薫の身体は酷く損傷していた。
右腕は肩口近くまで喰い千切られ無残な断面を覗かせている。左手はすべての指を失っていた。
太股の半ばから断ち切られた左足が、遠くに転がっている。
他にも乱暴に千切ったような傷が体中に点在した。
完全に破壊された人体がそこにあった。

祐斗はそれを茫然と眺める。眺めるしかない。

いつか祐斗を射抜いた瞳から、光が、失われていた。

そして、薫の胸にポッカリと空いた穴を見て、「心臓喰い」の腕にぶら下がった友人の心臓を見つけた瞬間、祐斗の意識は焼き切れた。

「……せ」

神器「魔剣創造」。祐斗は瞬時にもっとも手に馴染んだ魔剣を呼び出した。
悪魔の駒による付加能力、「騎士」で一気に加速し、「心臓喰い」に躍りかかる。

「――――――それを返せぇえ!!!」

いまさら心臓を取り返した所でどうにもならない。
しかし友人の心臓（命）を薄汚いはぐれ悪魔が握っていることが許せなかった。

「祐斗、やめなさい!!」

主の制止の声は、祐斗を止める力は持たなかった。

祐斗は、薫の心臓を握る、「心臓喰い」の右腕を手首の辺りから断ち切った。

醜い悲鳴が響く。

期せずして、それは薫が最初に負った傷と同じ位置であった。

祐斗は薫の心臓を取り戻した。

それ以外、用はないと言わんばかりに「心臓喰い」に背を向け、薫の遺体に近寄る。

あれはもう終わった命だ。

薫が撃退したみせたのだ。

命を賭けて、悪魔に打ち勝ったのだ。

だから祐斗には「心臓喰い」にトドメを刺す意思はなかった。

そうして、祐斗の思った通り「心臓喰い」の身体はすぐに灰になり、消えた。

あまりにあっけない最後だった。

祐斗の顔にはいつもの柔和な表情はなく、深い虚無だけが宿っていた。

薫の遺体を抱く。

随分と軽くなってしまった薫の身体。

そっと心臓を返してやる。

「……どうして、どうして君なんだ」

どうして、よりにもよって、僕の友人なのだ。
祐斗は嘆く。

やはり、無理やりにでも家に送ってやるべきだったのか。
薫の異変にもすぐ気付けるように、「願いの魔方陣」だって渡した。
あれは持ち主の求めに応じて悪魔を、グレモリー家の悪魔を呼び出す。
薫を、助けられたのだ。
何故だ、何故、機能しなかった。

「……祐斗くん、これ」

黒髪の大和撫子、リアスの眷族で「女王」姫島朱乃が祐斗に話しかける。
その手にはグシャグシャにされた「願いの魔方陣」があった。

「彼は、助けを望まなかったようですね。助けを、拒絶した。願いを求めない者にたいしてわたくし達は、無力です」

朱乃は痛ましい者を見る目を祐斗に向ける。

「……っは、はは、ははははは」

祐斗は笑った。
あまりに、らしい話しだ。

「そう、か。遊佐くんらしいよ」

自分の敵は、自分で倒すと決めたのだろう。
他人が作ったルールは障子紙を破くよりも簡単に破るくせに、自分

のルールだけは死んでも守る、
祐斗の親友は、そんな頑固者だった。
「……祐斗、彼を悪魔として転生させるわ」
リアスは覚悟を決めると懐から、「兵士」の駒を一つ取りだす。
「いいえ、遊佐くんは多分、蘇生を望みません」
祐斗にはわかった。薫は自分のやりきったことに満足して逝ったのだろう。
「でしょうね。私は今日初めて遊佐くんと喋ったけど、そんな頑なさを持っている子だったわ。だからこれは悪魔である私のエゴ」
この事件での自分はあまりにお粗末だった。
初動の遅さで事件をここまで大きくしてしまった。
たくさんの命が失われた。
そして今日も、助けられた筈の命を……とりこぼした。
はぐれ悪魔の始末まで人間である彼に押し付けてしまった。
あまりに取り返しのつかない数々の失態。
だから、もうひとつ。
私、リアス・グレモリーは恥を重ねる。
これは自己満足だ。
可能性の残ったこの命だけは、必ず生かしてみせる。
「私は恥知らずにも、望んでもいない人間を無理やり悪魔に仕立て上げる。遊佐薫という存在のすべての責任を私は負う。……良いわね、祐斗？」

力を失っていた祐斗の目に涙があふれる。

「お願いします。僕の、僕の親友を、助けてください……！」

額を地面に擦りつけ、祐斗は嗚咽を上げる。

『我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、遊佐薫よ。今再びこの地に魂を帰還せしめ、我が下僕悪魔となれ。汝、我が「兵士」として新たな生に……歓喜せよ！』

紅い魔方陣が薫を包み、傷を癒す。

溶け込むように「兵士」の駒は、薫の胸に消えていった。

「――――――ん」

小さく、それはとても小さい声だったが、死んだ筈の薫が声を発する。

「おはよう、遊佐くん。いや、薫」

目が開く。険のある強い意思を秘めた瞳が祐斗に向けられる。

「……気持ちよく寝てたのに起こしやがって。あとで殴る」

「それは怖いな。手加減してくれ」

祐斗は涙交じりに笑う。

そんな祐斗を見て、薫の反応は、

「つーか、おい木場、てめー顔が近いんだよ」

いつも通りの、小憎たらしい悪態だった。
薫は今にも抱きしめてきそうな祐斗を、鬱陶しそうに押しやるのだった。

第5話「喧嘩は用法用量をまもって正しく殺りましょう　前篇」

「グェエー!!」

木場の一撃により、俺の身体は地面と水平に吹き飛んだ。
地面に二回ぐらいバウンドて、ゴロゴロと転がってようやく止まった。

俺は身体をガバリと身体を起こして叫んだ。

「テメー殺す気かっ!?」

「殺す気で来い、って言ったのは薫じゃないか。それに、手加減したら怒るだろ?」

「当たり前だブッ殺すぞっ！」

「……理不尽すぎるよ」

悪魔に転生したあの日から一週間が経った。
あれからほとんど毎日、俺は木場に頼んで訓練をつけてもらっていた。目的はとにかく、劇的に上がった身体能力に慣れることだ。
俺はいまだ、自分の身体のスペックを使いきれていなかった。どうにも人間だった頃の感覚が抜けきらないのだ。
例えるなら軽トラに慣れていた人間が、いきなりスポーツカーを運転しろと言われたようなもので、慣らしに時間が掛かっている。

そして、もう一つ。
木場に付き合ってもらっている理由がある。

それは心構え。
「戦う」ということに、慣れるためだ。
俺も一応、腕に覚えはあるが、それはあくまで喧嘩の領域を出ない。生死をかけたやり取りには慣れていない。
現に、あの怪奇糞女に襲われた際は大いに取り乱し、あまりのストレスに幻覚すら見た気がする。いやあんま憶えてねぇけど。

というわけで俺は、今日も木場の神器とかいう卑怯極まりないマジックアイテムによって、景気良くぶっ飛ばされているわけだった。
「しかし、すげぇな。確か魔剣創造（ソード・バース）、だっけ？」
木場の手には何やら風を纏った抜き身の剣が握られている。
「そう。能力はその名の通り、あらゆる魔剣を生み出す力だよ。……でも訓練なら木刀の方がいいよ、やっぱり」
「緊張感のない訓練に意味なんてねぇ。練習ってのは張りつめて、追い込んでなんぼなのさ」
俺は立ち上がると、身体の調子を整えるように軽く跳ねる。
木場はため息をついていた。
「はぁ。まぁだいぶ、動きは良くなってきたね」
「あぁ、掴んできた」
俺は感触を確かめるように、つま先に地面を叩く。そして拳を握る

と、木場に向かって一歩を踏み出した。

そうして今日も、俺が一方的にボコボコにされて訓練は終わった。
木場、強すぎである。
まだ慣れていないとはいえ、まるで歯が立たない。

でも、すぐに追いつくさ。
だけど今日の所は、これでおしまい。

俺は訓練に使っていた校庭に大の字に寝転がった。
グハー。
身体中、いっそ殺せと思うほど傷だらけだった。
だが、それもじきにそれも治るだろう。悪魔の身体は治癒能力も折り紙つきだ。

日はすでに傾いている。
辺りはとても、静かだった。

校舎には人影はなく、当然校庭にも俺と木場以外の人間はいない。
ちなみに結界を張っているから、外から見ても俺達が何をやっているかわからないらしい。
便利にも程がある。

ただ、そんな結界を張らなくても、今の駒王学園には人はいない。
ここ一週間、駒王学園は臨時の休校状態になっていた。
血にまみれた失踪者の遺留品が、また一つ発見されたからだ。

俺と木場はもうあの失踪事件に、新しい被害者が出ないという事を知っている。そして失踪した人間は、誰も帰って来ないということも……知っている。

今も、我が子の帰りを信じて待っている親はどんな気持ちなのだろうか。
親の無条件の愛情なんて物、俺は糞ほども信じちゃいないが、それでも大多数の親は自らの子供を愛するのだろう。

「どうしたんだい薫？」

木場はどこかへ行ったかと思うと、スポーツドリンクを持って戻ってきた。
マネージャーの鑑のような男だ。
俺は身体を立ちあがって、ペットボトルを受け取る。

「どうしたって、なにが？」

「……いや、何でもないよ」

突然伸びてきた木場の指が、俺の目元を軽く拭った。
いやなんだよ。

「あぁ、そうだ。僕は君に謝らないといけないことがあった」

「はぁ？」

「僕が悪魔ってことを、黙っていてごめん」

木場は頭を下げた。

「なんだ突然。お前さっきから支離滅裂だぞ？」

「うん。でも思いついた時に言っておかないと」

まぁ、木場の中では大切なことなのだろう。
俺はとりあえず手ごろな位置にある頭を引っ叩いた。

「痛っ」

「叩いた俺の手も痛い」

「……絶対嘘だ」

「おい木場。テメェいつかやった身体測定のこと、憶えてるか？」

「え？あぁうん。なかなか衝撃的だったからね」

「お前、あの時言ったよな？『次は必ず本気出す』って。ちょうど校庭にいるんだし。……今から走るぞ」

俺は木場を置いて、スタート位置につく。
木場が慌てて、俺の隣に並んだ。

「勝つぞ？俺は」

木場は俺の言葉に驚いた顔をする。
が、すぐに意外と好戦的な笑顔を返してきた。
こいつも、普段は分かりづらいがかなりの負けず嫌いだ。

「それはどうかな」

そうして俺たちは走りだした。
夜遅くまで。身体が動かなくなるまで、走り続けた。
生ぬるい風を裂いて。

夏の始まりを、何となく察しながら。

「やっぱ、速いね」

「当たり前だボケが。俺を誰だと思っている？」

「誰なのさ？」

「そうだな～。リアス・グレモリーに喧嘩を売った男、かな？」

そして、
青春も悪くないが、忘れちゃいけないことがある。
宣戦布告は、もう済んでいた。
あとは、向こうがどういった反応を返すか、だ。

悪魔になった俺が最初に決めた目標は、リアス・グレモリーの打倒だった。

俺が悪魔となった、次の日。
俺は木場に連れられ、オカルト研究部の部室に来ていた。部室の調度品の圧倒的な趣味の悪さに頬が引きつる。
なんというか、今にも黒ミサが始まるんじゃないか、という有様だった。
オカルト研究部の名前は伊達じゃないというわけだ。

「マジで品性を疑う」

「いきなり失礼ね、ほら座ったら？」

ソファにゆったり腰掛けているグレモリー先輩は、対面のソファを指して言った。言われた通りおとなしく腰かける。

間に机を挟んで向き合う、俺と先輩。

「さて、それではあらためて自己紹介するわ。私はリアス・グレモリー。旧72柱に名を連ねるグレモリー家の次期当主。悪魔よ」

続いて、グレモリー先輩の後ろに控えていたポニーテイルの女子生徒が頭を下げる。多分年上だ。

「姫島朱乃と言います。これからお願い致しますね。リアスの眷族で『女王』をやっています。悪魔です」

んで、俺の後ろに立っている木場が言う。

「木場祐斗。今更だけどよろしくね。『騎士』の駒を与えられている。もちろん悪魔だよ」

「……ご丁寧にどうも。遊佐薫だ。なんだっけ、俺は『兵士』だっけ？どうやら悪魔に成っちまったらしい」

さっきから言っている「女王」だの「騎士」だのは、チェスの駒を模した眷族としての役割らしい。

上級悪魔とかいう奴らは「女王×1」「僧侶×2」「戦車×2」「騎士×2」「兵士×8」の駒を持ち、それらを自分の眷族に与えて、少数精鋭の部隊を作るらしい。

駒に応じて、特殊な能力があるとかないとか。

まぁ俺は「兵士」だし、下っ端だろう。

「話しが早くて助かるわ。説明しておいてくれたの祐斗？」
「えぇ。ある程度のことは」
グレモリー先輩は満足そうに頷き、俺を見た。
「遊佐君、いえ薫。あなたは私の眷族として蘇ったわ」
「よく蘇生したもんだ。ボロクズみたいになって死んでたろ俺？」
心臓を貫かれ、四肢も欠けていた。
ちなみに、今の俺は普通に五体満足だ。
……生えてきたのか？とか考えるとほんのりと怖かった。
「悪魔に転生するということは、そういうものなのよ。そうね、祐斗が説明したのなら質問を受け付けましょう。詳しいことはその都度話していくことにするわ」
「あ～、じゃあ一個だけ」
「あら、遠慮しなくても良いのよ？」
「うっせぇ。俺は、これからどうすりゃ良いんだ？」
「そうね、悪魔として生きてもらうわ。私の下僕として、悪魔の仕事をしてもらう。仕事内容はいろいろよ。時にはあなたを殺したようなはぐれ悪魔と戦うこともある」
お、さっそく俺が知りたかったことが出てきた。

「そう、それだよ！はぐれ悪魔。それに成るにはどうすりゃ良いんだ？あんたをぶっ飛ばせばいいのか？」

部室の空気が、明らかに凍った。

余裕そうだったグレモリー先輩の顔が険しくなる。

姫島先輩の目の奥に警戒が宿り、後の木場が身じろぐ。

「……それは、どういうことかしら？」

「どうもこうもねぇよ。あんたの下につきたくないから、その方法を教えてくれと言っている」

「意味がわからないわね。あなたは今や私の眷族で、下僕よ。私に仕えてもらうわ」

傲慢なもの言いとは裏腹に、さっきから感じていた慈愛の眼差しは、途切れることはない。たぶんそういう性格なのだろう。

しかし、眷族で、下僕だってよ。

ッハハハ、参ったな。

だから、

うん。

「それがぁ、気に入らねぇっつってんだよテメェ！」

俺は立ち上がり、目の前の机を蹴飛ばした。面白いようにはじけ飛ぶ１０キロは超えているだろう長机。

それがグレモリー先輩に当たりそうになった直前、見えない何かに弾かれる。

「あらあら、うふふ。随分やんちゃですのね？」

姫島先輩だ。

「動かないでくれ」

俺の首に刃物らしきものを突き付ける木場。
どうでも良いけど、お前それどこから取り出したの？
まぁ知らん。
必要なら動くぞ俺は？切りたきゃ切れ。

グレモリー先輩は動かずに俺を見ている。
俺はグレモリー先輩を睨む。
完成された構図だ。
外野は引っ込んでろよ。

「何がそんなに気に入らないのかしら？」

「まぁ勝手に俺を蘇生しくさったことは良いぜ？慈悲深くも許してやるよ。だけどそれ以外は駄目だ。全部だ、全部が気に入らねぇ！テメェが如き低能女が俺の主だぁ？言うに事欠いて俺に向かって眷族だ？下僕だ？仕えろだぁ？脳みそ湧いてんじゃねぇのかテメェはよぉ!!!」

俺の剣幕に、息の呑む音が聞こえる。俺は首に突き付けられた刃を掴む。

「ッな!?」

木場は剣を、引けない。
刃はすでに俺の指に喰い込んでいる。木場が剣を引けば俺の指は全て切れて、地面に落ちるだろう。

木場にはそれが、できない。
それを良いことに、俺は背後の木場に肘打ちを放つ。木場は剣を離し、バックステップで回避した。
よっしゃ武器ゲットだオラー。

「……いいわ、祐斗。手を出さないで頂戴。朱乃もよ」

グレモリー先輩の身体から陽炎のようなものが立ち上る。
俺は剣の柄を握る。
悪くない重量感だ。

「つまり薫。あなたは、私の王としての器を疑っているわけね」

「だから、さっきからそう言ってんだろ。テメェが誇れるのはどうせ家柄だけだ。いや、良いよ？グレモリー家。さぞかし高名なんだろうさ。是非頼りたいものだね。だがそれはテメェの背負ってる物であってテメェ自身じゃねぇ。家の名にも劣るような小娘を、王として認めろだなんて図々しいにも程があるんだよボケが！」

煽る煽る、全力で煽る。
ほらキれろよぉ、テメェが家柄にコンプレックスを抱いていることなんざ、こちとらテメェが名字を名乗った瞬間から察してんだ。

余裕ぶった態度で取り澄ましやがって、馬脚を現してみろ。

「……上級悪魔の嗜みとして、下僕への教育の仕方ぐらい私も心得ているわ」

先輩の手に陽炎が集まり、紅色の塊が生まれる。

「少し、頭を冷やしなさい」

紅蓮が迸り、俺に向かってくる。

ボケが。
俺は言動ほど熱くなっちゃいねぇんだよ。
頭を冷やすのお前の方だリアス・グレモリー。
自覚しろ、てめぇは今、見極められているんだぞ？

俺は迫り来る紅蓮に、その身を突っ込んだ。
上げそうになる悲鳴を噛み殺す。
これが木場の言っていた魔力の波動ってやつか。
なるほど、こいつは痛い。

「なっ、どうして!?」

先輩は愕然とした様子で俺を見ている。
どうしても糞もない。
避けると思ったか？そうだよな、わざわざゆっくりとした動作で、
わかりやすく繰り出したテレフォンな一撃だったもんな。

まったく。本当によ、テメェ、

「俺を舐めてんのかよ、リアス・グレモリー！」

燃える身体をそのままに、俺は一歩を踏み出し、剣を振り下ろす。

「っく！」

避けられる。
再び、先輩の手に魔力が集まる。
その力を感じる。魔力という未知のエネルギー。

しかし、それは放たれることはない。
その意思が、グレモリー先輩の目から感じられない。

だから俺は、好き勝手切りかかった。
剣を握っていない左手でも殴りかかったし、全力で蹴りを放ったりした。
そのすべてが紅色の障壁に阻まれたが、先輩の顔は歪んでいる。

「つまんねぇ、びっくりする程つまんねぇ喧嘩だよこれは！昨日悪魔になっただけの元人間にここまで言われてよ、テメェは亀みたいに引きこもるばかりだぁ！貴族？上級悪魔？主だぁ？あんま笑かすなよこの低能がっ！」

「……もう良いわ」

「あぁん！」

「もう、終わらせましょう。格の差を教えてあげる……!!」

グレモリー先輩の前方に紅い魔方陣が展開する。
鳥肌の立つような膨大な魔力の流れ。
そこから、
血のように紅い力の塊が、
噴き出した。

速い。
あまりの速度に、今度こそ反応すら出来ず、吹き飛ばされる。
先ほど喰らったぬるい魔力破とは根本から違う、凄まじい力の放流。
今の俺には、なす術もない。
部室のあらゆる調度が吹っ飛び、壁にも罅が入り、場所によっては

大穴が空いている。
そんな被害の中心に、俺は倒れた。

全身こんがり上手に焼けましたってか。
自分の身体から、なにやら食欲をそそる香ばしい匂いがする。勘弁してくれ。
俺は口から溢れだした血液を無理やり飲み下した。

「朱乃、ごめんなさいね。派手にやり過ぎたわ」

「いえ、お気になさらず。一日も頂ければ元通りにしますわ」

「……薫も、力の差はわかったでしょう？今後の身の振り方はよく考えることね」

そう言って、グレモリー先輩は俺に背を向け、部室を出ていこうとする。
ッハ、おいおい。なに勝手に勝ち誇ってんだボケ。まだ何も終わっちゃいないどころか、始まってすらいない。

「俺の意思は、変わらねぇよ、阿呆がっ」

俺は、立ち上がる。
全身くまなく痛い。血が流れ、呼吸が荒れる。
ただ、悪くない。
さっきの一撃からは俺をブチのめすという意思が感じられた。

「なぁ、さっきから俺は、喧嘩売ってんだよ。買ってくれよリアス・グレモリー。俺はテメェが気に入らねぇ。認めてなんかやらない。お前はどうだ？お前は俺をどうしたい？」

「ッ！……私はっ、あなたを！」

「認めねぇ。認めらんねぇよ、リアス・グレモリー！俺はあんたの下僕にはならない。あんたが俺の主だなんて言わせない。

俺は、俺だけのものだ。

それでも俺を屈服させたいのなら、全力で、それこそ殺すつもりになってかかってこいよ。本気を見せろ。決死になれ。

こいつは忠告だが、俺は立ち上がるぜ？何度だって立ち上がる。腕を喰い千切ろうが、足を切り落とされようが、心臓を貫こうが、どうやっても俺の意思はくじけない。

俺の心は、けして折れない。けして、反逆をやめない。けして服従しない、けして屈服なんて、してやらない。

それでも良いなら、俺に忠誠を求めてみろ。俺にリアス・グレモリーが主だと認めさせてみろよ。

あぁ、それともう一つ。これは余談だが、

――――――――――――俺は、あんたが嫌いだよ」

言いたいことを全部言って、俺はすっきりした。

いつの間にか手に持っていた剣は無くなっていが、まぁ良い。どうせ慣れない得物だ。ステゴロの方が性に合っているし。

そうして、俺は重い身体を引きずりながらも、リアス・グレモリーに拳を向けたのだ。

これは、宣戦布告だぜ？

結果だけ、言えば俺は負けた。

ボロボロのボコボコで、死んでないのが奇跡のような重傷を負わされた。

ただ、それは俺が何度も立ち上がった証拠で、

けして折れてなんかやらなかった証明だった。

最後はまぁ気絶したが、最後までグレモリー先輩を睨み続けてやっ

た。

先輩は泣いていた。

もう立ち上がらないでくれと、涙を浮かべていた。

これが、俺が部室で起こした騒動の顛末であった。

第5話「喧嘩は用法用量をまもって正しく殺りましょう　後篇」

それは怪奇糞女に殺害されたが、思わぬ方法で蘇生して迎えた……最初の朝。

リアス・グレモリーに喧嘩を売ることになる数時間前の話しである。

いつも通り新聞配達を終えた俺は、日が昇り始めた途端に猛烈にダルくなった身体を引きずり、ボロアパートへと戻った。

これが木場の言っていた「光への拒絶反応」らしい。何とも難儀な話しだ。学生にはちょいとキツイ体質である。

しかし、それも……、

「降って湧いた力の代償と思えば、まぁ納得できる。かな？」

視線の先。家の中へと続く扉の取っ手は、握り潰されたようにひしゃげていた。

昨晩、ある程度の説明を受けて家に帰った時に、やらかしたのである。

俺がやったのだ。

特に意識することもなく、俺は金属製の取っ手を握り潰していた。

「しばらくは、気をつけないと」

今までの感覚で身体を使っていたら、あまりに物騒だ。

その辺りの手加減は学ばなければいけない。
それと、自分で確認できることは、自分で予習をしておく。
と、いうわけで、俺は台所に立っていた。
別に料理の為ではない。
とはいえ、包丁は使うのだが。
俺はいつの間にか、新しく生えていた右手で包丁を握る。
左の手の平をまな板にのせ、包丁を近づける。
そのまま手の平に刃をあてて――――――
「よっ、と」
――――――引いた。
案の定、
……切れない。
手の平には擦ったような赤い線だけが残っていた。
やはり肉体の強度も飛躍的に上がっているようだった。
ぐりぐりと手の平の上で包丁を動かす。
いろいろ力の入れ方を工夫してみるが、結局薄皮が剥けただけで血が滲むまではいかなかった。
かといって、皮膚が硬くなっているとか、変に弾力があるとか、そういった様子でもない。普通の皮膚感と変わらない。
単純に、皮膚を裂くことだけができないのだ。
感覚だけ言えば、刃を潰した包丁で手の平をなぞっているに過ぎなかった。
当然、痛みもない。

「ふむ」

いい加減、刃物に対する恐怖心も薄れてきたな。

そろそろ良いだろう。

俺は包丁を逆手に持ちかえ、高くに振り上げて、手の平に向けて力いっぱい降り下ろした。

ッダン！

包丁は俺の手の平を貫通し、下に敷いたまな板にまで刺さった。降り下ろす力も強くなっているのだから当然である。

「痛覚は、まぁ普通だな。……あぁ、くそ。痛ぇよボケが！なんか腹立ってきた」

俺は包丁を手の平から引き抜いた。

ずるりと抜けた。

ずるりと。

痛ぇ。

どう考えてもやり過ぎた。

血に濡れて猟奇的な感じになった包丁を流しに置き、俺は患部に水を当てる。

溢れた血は片っ端から水に流していく。

刺し傷の断面が水の中で、はっきりと露出した。

生々しいピンクの患部。

俺はそれを観察する。

掛かった時間は１０分ほどだった。

手の平を貫通するほどの刺し傷が、ものの１０分で塞がってしまった。
カサブタをつくることもなく、徐々に傷は再生されていき断面が塞がっていく。
俺は何となく、昔見たプラナリアの再生映像を思い出した。
我が身体ながら、なんとも気色の悪い光景だった。
あぁ、そうだ俺は、
「……もう、人間じゃねぇんだ」

悪魔へと転生し迎えた、今日という日。
俺は自分が本当に人間でなくなったことを自覚し、何故か溢れてくる涙をただ静かに受け入れた。
人間だった頃の俺を、必死に生き抜いた遊佐薫の人生を悼んで、涙を流す。

今日から俺は、
悪魔として生きていく。

やることは変らない。
足は止めない。全力で、駆け抜けてやる。

だから、
今この瞬間だけは。
俺は、無様に泣くことを自分に許した。

時は経ち、
学校の授業は再開し始めていた。

俺はというとオカルト研究部に、再び呼び出されていた。
それまでは、「顔を出したらブチ殺しますわよ？」と姫島先輩に脅されていたので、大人しく木場と訓練に励んでいたわけだが。

どうやらグレモリー先輩は、俺に話したいことがあるようだ。
随分時間をかけたようだが、先輩は俺をどうするつもりだろうか？
なかなか楽しみである。

「薫、今度暴れたら絶対に僕が止めるからね？」

木場が俺にチクリと小言を言う。この野郎はあの肘打ちのことを、まぁだ根に持っていやがる。

「しつけーよ。それも向こうの出方次第だっつの」

そうさ、俺はいつだって出たとこ勝負だ。
必要があれば策を巡らすが、グレモリー先輩との問題にそれが必要だとは思えねぇ。

俺は木場を連れだって、部室に向かった。

部室はすでに元の通り、糞趣味の悪い調和を取り戻していた。

「思ったよりも修理には手間取りましたのよ？」
さきにお茶を淹れて待っていた姫島先輩も、やはりチクリと皮肉を漏らした。
俺はうんざりした。
「悪魔ってのは、どいつもこいつも終わったことを、グジグジ言うものなのか？」
「あらあら、うふふ。私は皮肉を言う相手は選びますわ。それに、大切な親友を精神的に凌辱されて、禍根を残さないほど薄情ではありませんの」
「はぁん。ッハハ、言うね。やんのかよ？」
「それもこれも、今日リアスが下す判断によりますわ」
俺と姫島先輩は睨み合いながら、ウフフアハハと笑い合う。
なんとも醜い光景だった。
ふいに、後頭部に激痛が走る。振り返ると木場が拳を振り切っていた。
「言った傍から君と言う奴は……。朱乃さんもあまり煽らないでください。薫は沸点の低さに定評があるんですから」
ほう、言ってくれるじゃねぇか木場。
ムカりときたが、良く考えなくても事実だったから何も言えない。
俺は鼻をならした。
「で、グレモリー先輩は？人を呼び出して待たせるとはさすが大物だ

な」

「女性の支度には時間がかかるものですから。じきに来ますわ。ほら座ったらどうです？」

「いやいい。つーかあんたら出て行けよ。これはグレモリー先輩と俺の問題だ」

「自らの主のことですから、これ以上ないほど関係ありますわ」

「その通りだよ、薫」

主、ねぇ。

俺にはどうやってもわからねぇ感覚だな。

そして、少しの時間が過ぎてリアス・グレモリーが部室へ現れた。

「本当に随分と待たせてしまったわね、薫」

リアス・グレモリー。紅い髪の先輩。

彼女は俺を見て、そう言った。

まっすぐとした、強い瞳だ。やる気充分って所だ。

なんだ、まだまだ折れてねぇじゃねーか。

悪くない。

上等だ。

何度だってやってやる。

俺はいつでも跳びかかれるように拳を作り、体勢を整える。

木場と姫島先輩が身構える。

部室の空気が一気に張りつめた。

「あぁ、まったくだ。もう忘れられたかと思ったぜ俺は」

言葉に敵意を乗せる。

俺の意思を伝える。

俺は変っていない。

あんたには屈服しないと、そう伝える。

「あれから私は良く考えたわ。あなたに言われたこと、あなたをどうしたいのか」

「あん？」

しかし、グレモリー先輩は一切かまえなかった。

敵意が素通りし、言葉が噛み合わない。

先輩は背筋を伸ばし、ただ静かに俺を見つめていた。

俺は、どんなにボロボロにされて感じなかった寒気を、先輩から感じた。

「私にとって眷族は、愛すべき家族のようなもの。だから私はあなたと家族になりたい。

私は、蘇生を望まないあなたを悪魔に転生させる時に誓ったの。薫の、遊佐薫という存在の全てに、責任をとるって。

なのにあの日、恥ずかしいことに私は、あなたの意思に呑まれ、引きずられてしまった。

あなたに攻撃を放つたびに、泣き出しそうだった。あの時の感触と、あなたの中に燃える私への敵意が、私にはどうしょうもなく痛くて、悲しかった。あの痛みを私は、けして忘れないわ。そして、もう同じことは繰り返さない。」

いま俺の前に居たのは、剥き出しのリアス・グレモリーだった。
余裕ぶった、へんに大人ぶったイケすかない女じゃない。

俺は、無意識に後ずさった。

「私は間違った。方法を間違った。あなたの敵意に敵意で返してしまった」

「それは当り前の反応だ。相手に呑まれない為には、そうするしかない」

「あなたにとって私は敵でも、私にとって薫は敵なんかじゃない。私はそれを忘れてしまった」

駄目だ、噛み合わない。
ひどく頭痛がする。思えばこの人は初めてあった時から苦手だったんだ。どうしょうもないほど、反感を覚えた。
あぁ、そうだ。
この人は、俺の母親に似ているのだ。
あの、最悪な女に――――――。

「だから薫。家族になりましょう。
私はそうしてあなたを眷族に向かい入れる。
気に入らないなら、何度でも向かって来なさい。今度は必ず、あなたが怪我をしてしまわないように、傷ついてしまわないように、優しく柔らかく受け止める。どれだけ傷を負っても構わない。
もうけしてあなたに引きずられない、けしてあなたと敵対なんてしない」

グレモリー先輩は腕を広げて、俺に近づいてくる。

「私は、あなたを抱きしめる」

緩慢な動作だ。
簡単に逃れることはできる。
だけど、俺は。
動くことができなかった。

柔らかく、温かい感触。
リアス・グレモリーの存在が俺を抱きしめた。

「……俺は、俺は〝保護〟されることが嫌いだ、虫酸が奔る。〝保護者〟が嫌いだ、奴らは傲慢だ。自分が相手の生殺与奪を握っているとすぐに勘違いする」

「違うわ。私はあなたを一方的に保護するんじゃない。一緒に、共に歩いていくの。
私はあなた一人に認めてもらえないような、情けない王だわ。それでも努力する。今は無理でもいつかあなたが誇れる王になってみせる。
だから薫、私を見守っていて。
私と共に歩んで、私が間違った道に奔ったら、殴りつけてでも止めてちょうだい。……ねぇ、どうかしら？」

穏やかで、慈愛に満ちた声。
痛い、痛い、頭が痛い。

「俺は、それでも……！」

「あとね、良いことを教えてあげる。悪魔同士の実戦型の模擬試合『レーティング・ゲーム』で結果を残せば、あなたは上級悪魔になる。そうすれば、あなたは自由になれるわ。自分ひとりで身を立てて、あ

なたはあなた自身の王になれる」

……!?

なん、だと？

頭に掛かっていた靄が一気に晴れる。

俺は、抱きしめてくるグレモリー先輩を引き剥がし、肩を掴む。

「テメェオラー！そういう重要なことは先に説明しろやボケェ!!」

「あら、元気になったみたいね。急にしおらしくなったから驚いていたわ」

先輩は意地悪く笑う。

その言葉に、顔が燃え上がるように熱くなる。

くそぅ。昔のことを思い出すと碌なことがない。

まぁいい。

そんな事情があるなら話しは早い。

俺は決めたぞ。

「上級悪魔に、俺はなるっ!!」

その為に、取り合えずあんたの傍にいてやる。

精々利用してやるから覚悟しろよリアス・グレモリー。

グレモリー先輩はほがらかに笑った。

「ええ。強くなりなさい、薫」

姫島先輩が微笑ましそうに、俺を見る。

「あらあら、うふふ。賑やかになりそう」

木場が苦笑する。

「まぁ、僕も手伝うよ、薫」

いろいろと手間取ったが、
こうして俺はリアス・グレモリーの眷族（仮）になったのだ。

第7話「茹だった脳内　フロムサマー」

部長ことグレモリー先輩の眷族（仮）になって、俺が最初に命じられたのは携帯電話の所有だった。
家に固定電話置いているし、それでは駄目なのか？って反論したら緊急時に連絡を取れないのが不味いらしい。
チッ、悪魔のくせして人間社会の利器に頼りやがって。
俺はしぶしぶ固定電話を解約して、安物のプリペイド携帯を購入した。

しかしそれ以来、俺の生活を好き勝手なタイミングで邪魔されるようになる。電波による無慈悲な蹂躙である。
いや、祐斗からの電話とかは別に良い。
姫島先輩とも時々メールを交わしたりする。
園長先生とか施設のガキどもから出来の悪いメールを送られてくるのも、微笑ましいもんだ。多少電話の頻度も増えたが、まぁ許す。

ただしグレモリー先輩、
てめーは駄目だ。

あの女、絶対彼氏とかを拘束するタイプだ。間違いない。
マジで俺の性格と相容れない。

そうしてまた、携帯が鳴った。
小さな液晶には『粘着女』の文字が。
ため息が漏れる。
我らがグレモリー部長からだ。

「……はい、もしもし？」

「ちょっと薫！あなたいつまで時間を掛けているの！」

あぁ、そうだった。
時刻は深夜。
現在俺は、悪魔の仕事とやらに駆り出されていたのだ。
見覚えのあり過ぎる「あなたの願いを叶えます」と書かれたチラシをご町内にバラまく、迷惑極まりない下っ端仕事である。

ふいに、新しい客が入って来て、自動の開閉扉が間抜けな電子音を立てる。
あ、馬鹿っ、この野郎！

「……薫、あなた今どこにいるの？」

「チッ。いや、まぁコンビニで立ち読みしてる」

「早く帰って来なさいっ!!」

安物のスピーカーをばりばり鳴らして粘着女は叫んだのだった。

数十分後。
俺は部室で正座をさせられていた。
が、すぐにやってられねぇ、と思ってすぐに足を崩した。
部長は頬をヒクつかせて俺を見ている。

「じゃあ、聞きましょうか薫。なんであなたはあれだけの時間を掛けて、チラシの一枚も配れていないの？」

そうなのだ。
あの胡散臭さ大爆発の紙を、俺は一枚も配っていない。まぁ途中一枚だけ鼻紙に使いはしたが。

「つーか、そもそも。叶えたい願いを安易に人任せにするような奴は、気に入らないし、意味がわからない。そんなボケナスの手伝いもしたくもない」

理由は、そういった超個人的なものだった。
だけど……うん。
やっぱ気に入らないわ。
人間は頼れる物が近くにあると、それにすがってしまうものだ。それを助長させるようなやり方もまた、好きではない。

部長は脱力した。

「あらあら。悪魔の存在意義を真っ向から否定してきましたわね」

姫島先輩が苦笑した。

「俺だったら、たとえ腕が吹き飛んでも、都合の良い助けなんて呼び出さないぜ？」

「それはそれで問題だよ……」

木場が頭を抱えている。どうした、嫌な事でも思い出したか？

「ハァ。とりあえず、また明日。配りに行ってもらうわ」

え～。

「薫、お返事は？」

「ミスターを付けろよデコスケ野郎！」

「欧米か！」

祐斗が俺のボケに突っ込みをいれた。

いや人のこと言えないけどさ。お前時々、激烈にネタ古いよな？

部長の胃に穴が空くまで、そろそろ秒読みである。

悪魔の生活も、なかなか難しいものだった。

季節は夏。

鬱陶しい梅雨も終わり、夏休みを後に控えさせている。

そんな、いつもの日の出来事である。

炎天が肌を焼く。

呼吸のたびに肺に入る、熱せられた大気が重い。

乾いた喉がひり付き、唾液がうまく飲み込めなかった。

したたる汗も拭うのが面倒で、すでに垂れるに任せている。

光を苦手とする悪魔にとってこの状況は毒でしかない。俺は自分の身体が、突然に灰になって崩れだしたりしないだろうかと、微妙に不安だった。

しかし、それでも、立ち去る気にはならない。

前に立つ男から、目を離すことができなかったからだ。

今日、この場の主催者である彼は、夏の日差しなど呑み込んでやる

と言わんばかりに、高らかに声を上げている。いや彼だって暑いものは暑いだろう。その顔は汗にまみれている。
それでも、彼は言いたいのだろう。語りたいのだろう。分かって欲しいのだろう。

この町の愛している。
この町を守りたい。
この町の役に立ちたい。
日頃暮らす当たり前の日常に、ささやかながらも、手を尽くしたい。

そんな、切なる思い。
俺は涙がこぼれないように、上を向いてこらえた。
見上げた空には太陽が。
俺は鼻をならしてやった。
ハッ、大したことないね。お前なんかより、前にいるあの人の方がずっと熱いんだぜ。

とある休日。
すでに陸上部を退部していた俺は、回覧板でまわってきたお知らせに、丸をつけた。

――――――――今日の俺は、ご町内の定期清掃に……参加している。

俺は感動していた。
すげぇ、あんた凄いよ。どれだけこの町を愛しているんだよ。
都会の町、なんて曖昧な区分をどうしてそこまで愛することができるんだよ。
そうか、これが……郷土愛、か。
俺は昔から微妙に根なし草な生活だったから、そういった意識は薄かった。だから余計に感じ入ってしまうのかもしれない。

素直に、羨ましいと思った。妬みなんてネガティブな感情じゃねぇ。
俺も、そうなりたいと思ったんだ。
参加して……良かったぜ。
俺は心から思っていた。久しぶりに気持ちの良い気分を味わっていた。

「これ、良かったら使って欲しいにょ」

「すまねぇ、ありがとう」

俺は横合いから差しだされたハンカチを受け取り、湿った目元をぬぐい、鼻をかんだ。
……ん？反射的に受け取ってしまったが、相手は誰だ？
俺は顔を横に向けた。

そこには、漢がいた。

二メートルを超える体躯に、はち切れんばかりの筋肉。体幹はけして揺るがず、足は地面に根を下ろしているかのようだった。
しかし、他人を圧迫するような粗野な印象はない。
まるで、武道家が家族に向けるような穏やかな風貌をしている。
そして、何よりも、

ッ、こいつっ、なんて涼やか目をしてやがる……！

漢と目が合い、俺は戦慄した。
いまどき子供ですら、こんな澄んだ目をしていない。
こいつっ、ただものじゃない!!
俺が僅かに身構えた所で、漢は呟いた。

「この町に越してきて数年、ミルたんは大切なものを忘れていた気がするにょ」

俺はその言葉を聞き、すぐに構えをといた。

漢は同志だった。構えてしまったことすら恥ずかしい。

「あぁ、それはきっと、大切なことだ」

俺たちは頷き合い、演説を続ける彼に再び目を向けたのだった。

話しが終わり、各々が所定の掃除箇所に向かっていた。

周りに集まっていた暇なオバチャンや、嫁に駆り出された企業戦士はなぜか一様にダレた表情を見せている。

何故だ？

暑くてダルイのか？

いや、暑さがなんだ？

主催者の彼の言葉が届いていないのか。

彼の願いを聞いていなかったのか？

俺は唇を噛み、気づけば強く拳を握っていた。

そして、俺が奴らに向かって、一歩踏み出した所で、

「やめたほうが良いにょ、拳というものは受け入れる側に心構えが出来ていないと、意味がないもの。彼らの目は……曇りきっているにょ」

大きな手が、俺の肩を掴んでいた。

けして強い力ではない。しかし、俺は動く事が出来なかった。

「あんた、さっきの」

「今はただ、自分にできることをやるにょ、その姿がきっと、人々の目を覚ますにょ」

「……そう、だな。俺、掃除するよ！」

漢は俺の言葉に頷き、笑った。
残念ながら、彼とは掃除場所が違っていたので、そこで別れた。
別れ際、彼は言った。

「縁が合えば、また会うにょ」

なんて、清々しい漢なんだ。
喋り方がヘンだの、恰好がなんか魔女っ娘のようだなんてこの際、関係ねぇ。
人の本質はそんな所にはない。
もっと深い所にあるものなんだ。

さて、俺も自分の掃除場所に向かおう。
俺に割り振られた、

――――――――町外れの教会へ！

おかしい。
俺は高台にある教会に向かう道中に、奇妙な違和感を覚えていた。
違和感は教会に近づくほどに大きくなり、
教会が目視できるようになった頃には、とてつもなく大きなものになっていた。
呼吸が乱れる。
総毛立った肌に、冷や汗が流れるのが不快だった。

凄まじいほその忌避感。
これは、間違いない。
身体が、教会に向かうことを拒絶しているのだ。
そうだ、忘れていた。
俺はいまや悪魔だ。日の光にすら倦怠感を覚えるのだ。
教会なんて悪魔の天敵に決まっているだろう。
それは悪魔として本能的な恐怖心だった。
……なら、どうするよ遊佐薫？
このまま教会にたどり着くことすらできず、逃げ帰るのか？
「ハッ！ごめんだねぇ、俺は掃除をするんだ……！」
覚悟は決まった。
俺は一歩一歩確実に足を進めていく。
そうさ、いまここにいるのは悪魔である俺じゃねぇ。
ただの〝遊佐薫〟だ。
等身大の、剥き出しの、立場なんて関係のない、〝遊佐薫〟なんだっ！
俺は荒い息を漏らしながらも、歯を食いしばって前進する。
ぐぅぉおう！
足が進まねぇ。斥力を、斥力を感じる！
くそがぁ、ぼけオラー、本能がなんぼのもんじゃい。生物的な本能に勝てなくて、なぁにが文化人なんじゃい。わしゃ負けんぞコラー!!
ふいに、電話が鳴った。

誰だ、こんな大事な場面で電話をしてくるのわ。まじ空気よめ！

携帯を取り出た。

液晶を見ると『王子（笑）』の文字が。

祐斗だった。

あんのくそ野郎……！

ほんとにテメェは、うん。マジで、そういうとこあるよね！独特の間の悪さというかね！

俺は、変な諦観を呑みこみ、通話ボタンを押した。

「祐斗、か。なんの用だぁっ」

「え？あぁ、休日だし、一緒に訓練でもどうかなと思って。……なんか辛そうだけど、どうしたんだい？」

「あぁ、悪いっ、今日は町内清掃に、参加してて、な。いま、現場に向かって、いるんだ！」

「それだけで、なんでそんなに消耗してるの!?」

「その場所ってのが、教会でなっ。正直くじけそうだが、俺は負けねぇ。たどり着いて、みせるぜ！」

「え、ちょっと待って薫！いま教会と言ったかい!?」

「あぁ、だが安心しろ　内なる自分に、屈服なんてしないぞっ。んじゃ祐斗、応援しててくれな！」

「待つんだ薫！教会は悪魔にとって、」

俺は電話を切った。

祐斗が最後に何か言っていたけど、まぁ大したことではないだろう。
再び教会に向けて歩みを進めるのだった。

数分後。
ふと、地面にある俺の影に、別の影が掛かった。
雲でも出てきたのか？
俺は不思議に思い、頭上を仰ぎ見た。
「こんの、お馬鹿ぁあああああ！」
部長が背中から蝙蝠のような羽を生やし、急降下してきていた。
「なっ！」
そのままの勢いで振るわれる手刀。
「モルスァ!?」
クリンヒット。
頭部に凄まじい衝撃が奔る。
俺は奇声を上げ、地面に勢いよく倒れた。
部長が息を乱しながら、凄まじい表情で俺を見降ろしていた。
あ、駄目だ。意識が朦朧とする。
ぐぅぬぅ、俺が倒れても、第二、第三のファービーが……!!
謎の電波を受信した所で、俺の意識は途切れた。

目を覚ました俺は、オカ研の部室でソファに寝かされていた。
いったい、何が起こったんだ？
状況が分からず、身体を起こす。
「遊佐くんが目を覚ましたわ、部長」
「そう、よかった。緊急時とはいえ、強く打ち過ぎてしまったから」
「あらあら、もっと強くブッ叩いても良かったのですよ？」
「勘弁して上げてください」
部室には姫島先輩や部長、祐斗まで揃っていた。
「なんで俺、部室に？」
そう聞くと、何やらホッとしていた部長が、怒ったように眉を上げた。
「あなた、教会に近づいていたわね？」
「まぁ、町内清掃だったし」
「どんな理由があっても二度と教会に近づいては駄目よ。悪魔にとって教会は鬼門なの。単純に成り立ての悪魔には悪い影響を及ぼすし、踏み込めば光の槍が飛んできてもおかしくないの」
「光の槍？」

「天使が射る聖なる槍よ。今のあなたじゃ掠っただけで浄化され、灰にされるわ」

俺はゾッとした。

「おまっ、そういうことはあらかじめ説明しとけやっ！」

「うっ。……ごめんなさい、その、うっかりしてたわ」

そう言い、部長は視線をそらした。

この人マジで時々、天然入るからけっこう怖いのだ。

しかし、光の槍ねぇ。……あれ？待てよ。

俺はポケットに突っ込んでいた町内清掃の案内を取り出す。

「あぁ、やっぱりだ。あの教会って今は閉鎖されているらしいぜ？」

部長に案内の紙を見せる。

そこには、〝現在閉鎖されている為、教会内への立ち入りを禁じる〟というただし書きがあった。

清掃箇所は、あくまで教会周辺になっている。

「……閉鎖、ね。おかしいわ。そんな報告は受けていないもの」

「おいおい、この土地の管理者だろ？大丈夫かよてめー」

「うるさいわねっ、天使については不可侵なことが多いのよ！……まぁそれは後で調べるとして、薫。人の信仰から外れた教会でも、天使の領域からは外れていない場合もあるわ。どちらにせよ近づかないことね」

「善処する」

「厳守なさい」

その日は、木場と軽い模擬戦をして、姫島先輩の魔力のレクチャーを受けてお開きになった。

もちろん、清掃を行えなかった埋め合わせに、目についたゴミを拾って帰ったことは言うまでもない。

こういうのは気持ちが大事なのである。

リアス・グレモリーは思う。

遊佐薫は、どこか歪んでいる。

けして折れない意志を持つ青年。人間の身でありながら、その命を燃やしてはぐれ悪魔を打倒して見せた。

尋常なことではない。

言い方を変えれば、普通ではない。

なんの訓練も受けていない人間が無手ではぐれ悪魔に致命傷を与えたのだ。

聞けば、腕を喰い千切られながらも、助けを願わなかったというではないか。

彼の親友である祐斗はそれを、薫らしいと表現した。

あんな異常なことを仕出かす「らしさ」とはなんだ？

正直に言うならば、リアスは当初、薫を恐れていた。

しかし、部室で口論になり、その凄まじい敵意を向けられた際に、そ

の恐怖は憐れみへと変わった。

この子は、とんでもなく強い生き物だ。

きっと本当の意味で、一人で生きていけるような子だ。

その強さこそが、リアスには悲しかったのだ。

薫の今までの人生を考えてしまう。

どういう育ち方をすれば、あんな手負いの獣のような人格が出来上がるのか。確実にまともな教育は受けてはいまい。

それは聞きようによっては失礼な想像だが、あながち間違ってはいなかった。

部室でのいさかいから帰ったリアスは、家に閉じこもった。自分がいくら攻撃しても退く意思を見せなかった薫の目が、ずっとリアスを睨んでいる気がした。

何日か経つと、祐斗から電話が掛かってきて、助言を受けた。

『薫は、部長と殺し合いがしたかったわけじゃありませんよ。喧嘩を、したかったんです。自分はこういう人間だ。それで、お前はどういう人間なんだ、ってそう言っていたんですよ』

『随分と、苛烈な親友ね』

『ええ、僕の自慢です。……部長、薫は放っておいても好きに生きていきます。誰の助けも受けずに突き進みます。だから、無理やり薫を受け入れなくても良いんですよ?』

祐斗の言葉に、リアスは心の底から感情が吹き出てくるのを感じた。

駄目だ、駄目だ。

認められない。認めるわけにはいかない。
それだけ認めてはならないのだ。

あぁ、そういえば、薫もそう言って、私に吼えていた。

リアスは覚悟を決めた。

『決めたわ、祐斗』

『部長？』

『もう難しく考えない。私はただ、薫にしてあげたいことをしてあげる』

そうして、リアス・グレモリーは薫を抱きしめた。
あれから少しの時間が過ぎて、薫は相変わらず反抗的だったが、ときおり笑顔を見せてくれるようにもなった。
その顔が本当に子供のようだった。
リアスの中で、薫への愛おしさが募る。
元来リアスは、眷族に対して深い情愛を抱くのだ。

これからも私がしっかりと、面倒を見てあげないと。
あの子はとても危なっかしいのだから。

そんなことを思いながら、部室で朱乃の淹れた紅茶を飲んでいた所、祐斗からの連絡が入る。

『部長！か、薫が、教会に向かっているそうです!!』

リアスは、はしたなくも紅茶を噴き出した。
そして大慌てで、現場に急行したのだった。

リアスは気絶させた薫を部室のソファに寝かせた。
今回はさすがに肝が冷えた。

「あのタイミングで電話して良かった」

「無理やりにでも、携帯を持たせて正解だったわ」

祐斗とリアスは揃ってため息をついた。
その様子を朱乃はクスクス笑いながら見ている。二人の姿は、なんだかやんちゃな子供に手を焼く親のようだった。

第8話「被害者と加害者は見方によって裏返る」

とある日の教室にて。

「やっぱり木場×遊佐よ。王子様の木場キュンが無愛想な遊佐キュンをねっとりと追い詰めていくの！」

「たわけっ、遊佐×木場こそ至高。木場君の凄まじい誘い受けに、『ツンデレ』な遊佐君がおずおずと手を出す！これだろうっ」

「引っ込んでろ素人がっ!!遊佐様は『ツンデレ』にあらず。あのお方はツンデレの皮をかぶった『素直クール』だ！そこを間違えるな!!」

「「今年の夏は掛け算が熱いっ!!!」」

暑さで頭の沸いた馬鹿どもが騒いでいた。

祐斗は俺の隣で苦笑いしている。

俺はというと、どうやったら馬鹿な女子どもを合法的にブッ殺せるかを考えていた。

いったい何が心の琴線に触れたのか、最近は女子たちが俺と祐斗の方を見てキャーキャーとうるさいのだ。

どうやら俺と祐斗を使い、おぞましい想像を働かせているらしい。

いまだこの拳を振り抜いていない俺の自制心、マジでノーベル平和賞。

「あぁ、それと薫。今日の放課後空いてるかい？」

「え、マジで？このタイミングでそういうこと言うのお前？」

空気読めよっ！

案の定、女子たちの騒ぎがいっそう大きくなる。

「……ごめん、軽率だった」

俺は深いため息をもらすのだった。

放課後。

俺と祐斗はオカ研に向かって歩いていた。

「でも、本当に陸上部やめても良かったのかい？」

「あぁ、別に陸上部でなけりゃ走れないってわけでもないからな」

祐斗の問いに俺は気軽に答えた。

そう、俺は陸上を退部していた。

グレモリー部長に言われたということもあるが、何よりも俺が望んだことだ。

俺は、すでに悪魔だ。

人間の規格から外れ、身体能力も普通じゃない。

無論、陸上部で本気で走ることなどできやしない。在籍する意味など、もうどこにも残ってなかったのだ。

それよりも、

これから悪魔として生きていく為に、俺は必要なことをしなければならない。

俺は退部届を出したその足で、オカルト研究部に入部届けを出した。

ちなみに特待生の問題は先輩が解決してくれた。なんでも、駒王学

園の上層部は悪魔の息が掛かったもので占められているらしい。
なにそれ怖い。
どうやら人間社会は、思ったよりも悪魔に乗っ取られているようだ。

「ま、やめてしまった分、別の分野で頑張らねぇとな」

悪魔の社会は意外に文化的だったが、まだまだ「力」が大きくものをいう。

俺は、進路をオカ研からいつもの訓練場に変える。
祐斗は疑問を持たずに、以外に似合う好戦的な笑顔を見せる。

「そうだね、僕も負けていられないな」

こうして俺たちは今日も歩みを進める。
どんなに遅い速度だとしても、けして歩みを止めない。
それが俺の生き方を示す、唯一の道しるべだった。

模擬戦は、今日も祐斗の勝利で終わった。
悔しくもあるが、戦いはすでに一方的な展開ではなくなっている。
俺の拳や蹴りが何度か祐斗を捉えていた。
しかし、決定打にはならない。
祐斗の速さが追撃を許してくれないのだ。
いやしかし本当に速い。
やる気が失せるレベルだ。
どれくらい速いかと言うと、俺が魔力で身体強化して出す瞬間的な最高速度が、祐斗にとってのスタンダードな速度である。
マジ化け物かテメェ。
スピードジャンキーにも程がある。切符を切られてしまえ。

悔しいが、戦いの技術や経験も祐斗が勝っていた。
だが、戦いの巧みさでは負けていない。
祐斗が何度もやりにくそうに顔を歪めるのを見ている。あいつもあれで、意外と直線的だったりするのだ。
誘導するのも対した苦労ではない。その為、攻撃は当てようと思えば割と当てられる。

けれど、いくらやっても俺は模擬戦で勝てない。

俺の拳に祐斗を一撃で倒せるような威力はまだない。しかし祐斗は、俺に一撃を入れれば勝負を決めてしまえるのだ。俺の防御が薄いというわけではない。けしてない。
祐斗の所有する神器・魔剣創造が凶悪過ぎるのだ。
まぁ、それは祐斗の強みだ。あいつは好きにその道をひた走ればいい。
一番の問題は他にあった。

おそらく祐斗は、俺の攻撃を脅威とみなしていない。
現にあの野郎は、多少の被弾などは物ともせずに剣を振り切ってくる。

これは、問題だ。
これだけは、どうにかしなければならない。
舐められっぱなしの状態を受け入れるほど、俺は賢い人間ではないのだ。そもそも、そんな賢さなどこっちから願い下げだった
そうだ、これは矜持の問題なのだ。

訓練の後は、いつも部室で姫島先輩のレクチャーを受ける。
姫島先輩はいつものように紅茶片手に、対面のソファに座っている。

「ではでは、訓練の成果を見せてくださいね」

俺は頷き、手に持ったペットボトルに意識を向ける。

中には半分ほどの水が満ちている。

そこに魔力を、込める。

魔力を操るイメージは、何とも言えない。強いて言うなら「第三の腕」を生やす感覚だ。自分の身体に架空の運動器官を生み出し、それを動かすようなイメージ。

すぐに、ペットボトルの中で水が渦巻き始めた。

「あら、やっぱりここまでスムーズですわね。では、次のステップです」

俺は、その言葉に頷き、更に集中する。

渦巻く水が、ペットボトル内で浮き上がり、一つの塊になる。

ここまでは良い。うまく行っている。

しかし、

「……ッグ、ァ」

声が漏れる。

いくら魔力を通しても、望む変化は起きてくれない。

「あ！……くそっ」

水はペットボトルの底へ落ちてしまった。渦巻きも消えている。

「上手くいきませんわね」

姫島先輩の手が伸び、俺の手の内のペットボトルを持っていく。

鈴が鳴るような高い音。
間近で感じる魔力の脈動。
水はペットボトル内で渦巻き、中に浮く。
そして、

内側から破裂するよう弾けた。

液体だった水は瞬時に凍りつき、霜を散らす氷の棘となる。それが、ペットボトルを内側から突き破ったのだ。
見事なものだ。
見事過ぎてなんか、むかつく。

「チッ、なんかコツとかねぇのかよ？」

「そうですね、出来るものは出来るとしか言いようがありませんわ。魔力の源流はあくまで個々のイメージですから」

「つーか、水が一気に個体に変わるイメージってどんなだよ？」

「うふふ、まだ想像がつかないでしょうね。そもそも元人間の転生悪魔は、魔力の扱いを苦手とする者が多いのです。人間にとっては魔力の扱いなんて完全に埒外でしょう？だからどうしても想像が追いつかない。それが当たり前という認識が持てないのです」

「はぁん」

確かに、俺は創造力の豊かなタイプではない。
常に現実に追い回されてきたリアリストである。

それでも、今の俺にとっての常識は、人間側ではなく悪魔側のものだ。考え方から改めなければならない。
必要なのは、魔力が扱えて当たり前と言う認識。

しかし、元人間の転生悪魔は魔力の扱いが不得手だという。ならば彼らはどうやって戦っているのだろうか？

「……あぁ、なるほど。神器か」

「はい？」

「いや、悪魔は神器を持っている人間を優先して眷族にしているのかな、と思って」

「あらあら、やはり鋭いですわね。その通りですわ。神器が扱えるのならば、苦手な魔力を無理に使う必要もありませんもの。それだけ神器とは強力ということです。純粋な悪魔とて神器を重宝しますのよ？レーティング・ゲームでも上位のプレイヤーの多くは何らかの神器持ちです」

「……なるほど、ね。祐斗とかがそういうタイプだな？あいつは戦闘中にほとんど魔力を使わない」

ときおり、瞬間的な防御のために魔力を回したりするくらいで、基本は神器の扱いに重きを置いている。

「その通りです。もともと祐斗くんはそれほど魔力を持っていませんから」

「へぇ。ちなみに、俺の魔力量ってどんくらい？」

「そうですね、平均よりも少し下回っているくらいかしら」

マジ中途半端な。

「……ちなみに、部長や姫島先輩は？」

「ざっと薫くんの４倍ほどでしょうか。もっとも私はリアスよりも下ですけどね」

……４倍ってテメェ。この魔力富裕層どもが。

しかし、それで納得が行く。それだけの魔力量を誇っていれば神器を必要とせずに戦えるだろう。

部長に至っては、何やら血筋で受け継ぐ特殊な能力まで持っているらしい。

「……それでも、薫くんの魔力の操作能力は目を見張るものがあります。伸ばすとしたらそこでしょうね。精密な魔力の操作なら、すでにかなりのものですわ。魔力による身体強化って以外に難しいですのよ？」

黙り込んだ俺が落ち込んだとでも思ったのか、姫島先輩は何やらフォローじみたことをする。内容と言うよりも、その気遣いが何よりこそばゆかった。

憐れむなよ、俺を憐れむなオラー。

「まぁどっかの馬鹿ポニーテイルみたいに、ぶっ放すだけしか能がないわけじゃないし、気にしてねぇよ」

実はいうと、俺は姫島先輩とも模擬戦をしたことがある。結果はまぁ惨敗だった。距離を取られて、後はひたすら魔力による絨毯爆撃である。

あれは戦いとは言わない。
一方的な蹂躙である。
俺じゃなかったら確実にトラウマになっていた。

そんな雑談をダラダラしながら、色々と魔力運用の実演をしてもらっていると、どこかへ出かけていた部長が帰ってきた。

「あら、リアスお帰りなさい」

姫島先輩は、お手本として見せてくれていた魔力球を分解すると、紅茶を淹れに席を立った。
俺は見よう見まねで作った魔力球を手でがっしり掴む。
実体はないが、手の内には秘められた熱量が存在感を主張している。
こうなると何かにぶつけてみたくなるな……。

……ふむ。

「なぁ、部長」

「何かしら薫？」

部長が俺の言葉に振り返る。

「オォラァァ！」

俺は魔力球を大きく振りかぶり、
粘着女よ砕け散れ、という呪詛と共に投げ飛ばした。
自らの身体は、投擲の為にある一つの機構だという自己暗示。
狙いは寸分違わず、部長の顔面に向かう。
我ながら惚れ惚れするオーバースロー。

しかし渾身の魔力球も部長の手により、いとも簡単に弾かれてしまう。

「あら、いきなりご挨拶ね」

まるで動じていない。

やはり、この程度じゃ部長には通じないようだ。

弾かれた魔力球は、壁に罅と焦げ目を残して消えていった。

それでも大した威力だと思ってしまうのは人間だった頃の感性だろうか。

「あらあら、う、ふ、ふ」

「うわっ」

声がして、慌てて振り返る。

俺のすぐ後ろに、姫島先輩が額に青筋を浮かべて微笑んでいる。

なんだよ、どうした？

そのまま俺は部室の隅にまで連れて行かれ説教を受けた。

何故だ。わざわざ気を使って、声をかけてから投げたというのに。

その日、何故か俺にはバカみたいな量の課題が出された。

ふぁっきんクソポニー。

毎日はそうして続いていた。

俺の悪魔としての日常。

そしていつものように、

今日もまた夜がやってくる。

俺たち悪魔の時間。

新聞配達のバイトに備えて、もう寝ようかと考えていた時に、その電話が掛かってきた。

液晶には粘着女の文字。

勘弁しろよと思って電話に出る。

「テメェ、今何時だと思っていやがる」

「薫」

電話から聞こえる部長の声は硬質だった。

気持ちがカチリと切り替わる。

「何があった？」

「この町にまた、はぐれ悪魔が侵入したわ」

「……はぁん。で、殺すのか？」

「ええ、打って出るわ。今度こそ好きにはさせない」

部長は宣言すると、集合場所を告げて電話を切った。

俺は、習慣として身体に巡回させていた魔力を落ち着かせる。

そして、いつでも使えるように研ぎ澄ます。

はぐれ悪魔が、やってきた。

人間であった俺を殺した、暴力の塊。

一度奪われた心臓が、馬鹿みたいに速く脈打っていた。
身体の震えは止まってくれない。
つまりは、

「絶好調ってわけだ。さぁ、行くか」

俺はニヤリと笑い、家を出た。

集合地に着くと、すでに俺以外のオカ研は全員そろっていた。
みんな思ったよりも気負っていない。

「緊張しているのかい？」

黙れ祐斗。あと顔が近い。

向かった先は小さな町工場だった。
はぐれ悪魔はすぐに見つかった。
なにやら、重機にこびりついた機械油をベロベロと舐め回している。
単純にきめぇ。
何がしたいんだ？

「アァァァ、良いっ！」

とか、叫んでいるし。
ともあれ、やることは変らない。
ブッ殺す。

「なぁ部長。こんだけ集まってもらって悪いけど。あれ、俺にやらしてもらえない？」

それは電話を受けた時から考えていたことだ。
部長は不敵に笑った。
あくどい顔だ。だが、悪くなかった。

「最初からそのつもりよ。現時点での、あなたの力を見せて頂戴」

「はいよ」

俺は気軽に、はぐれ悪魔に近づいていく。
そのはぐれ悪魔は男だった。
基本的にどこにでもいる人間に見えるが、明らかに違う点があった。
そいつは腕の変わりに、肩口から何かムカデのような節足の触手を生やしていた。
はぐれ悪魔の気持ち悪さ、プライスレス。

「お～い、なんかお取り込み中悪いんだけどさ」

「アァアアウ、良い、凄く良い」

「まぁこっちの事情でお前を殺さないといけないんだわ」

「良いよォ、凄く良い。まだまだイケルさ」

「いや、ハハハ、うん」

「アヒァウァァアァアウウアウ」

「聞けよテメェ」

俺は面倒臭くなって、右手に集中させていた魔力をムカデ野郎に奔らせる。
部室で部長に何度か喰らわされた技だ。
身体で覚えていた分、比較的早く再現できるようになっていた。

「グシャアァア!?」

ムカデ野郎は吹っ飛んでいった。しかしそれほどのダメージは負っているように見えない。
やはり、威力不足だ。

ムカデ野郎はようやくこちらを意識したのか、体勢を整えると襲いかかってきた。

「まぁ、せっかくの実践だし、色々試させてもらうぜ?」

俺は、拳を握り迎撃の姿勢をとった。
戦いが始まる。

「ッシ!」

俺はムカデ野郎の面に蹴りを喰らわせ、吹き飛ばす。
戦闘を初めて１０分は経ったろうか、俺の身体にはいくつかの傷が刻まれている。
あの両腕は思ったよりも厄介だ。

「エァアアエアアヒヒア!」

ムカデ野郎は立ち上がる。身体中いい具合にボロボロだが、まだまだ五体満足で元気凛々だ。

ハァ、俺けっこう攻撃当ててんだけどね？

「んじゃ、そろそろ行くか？」

向かってくるムカデ野郎をかわす。
何度も何度も、受けた攻撃を受け流す。
こちらからは手を出さない。
結果、１分間で二回の被弾。血が溢れる。

俺は、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の特性を発動させる。俺に与えられた駒は「兵士」だ。
その力は敵陣地において「騎士」「戦車」「僧侶」の能力が使えるというもの。
最初に使うのは祐斗で見慣れている「騎士」の力。

ぶわり、と世界は加速する。
俺は思わず舌打ちを漏らし、暴走しそうな身体を押さえつける。
祐斗の野郎、この加速力の中でよく、あんな自由に動き回れるな。

俺は、「騎士」の力を使ったまま、ムカデ野郎の攻撃をかわし続ける。
先ほどと同じように、こちらからは手を出さない。
１分経過。
被弾はゼロ。なんとも頼もしい力だ。

俺は、「騎士」の力を解き、ムカデ野郎を壁際まで追い詰める。
身体を魔力によって強化して、全力の拳を奴の腹に突き立てる。
壁に押し付けられたムカデ野郎の身体は、くの字に折れ曲がった。
しかし、それだけ。
奴の目からは戦意が消えない。

俺は、「戦車」の力を発動させる。

その能力は、とてもシンプル。

触手の腕がうねり、俺の身体に突き立てられる。

しかし、

「ギィイイアアァ!?」

壊れたのは奴の腕の方だった。

「馬鹿げた力と、防御力だっけか？」

俺は、再びムカデ男の腹に拳を叩きこむ。

奴は血反吐を吐き散らし、背にしていた壁には蜘蛛の巣状の罅が入った。

「戦車」すげぇ。

俺はバックステップでムカデ野郎から距離をとる。

そして「僧侶」の力を発動させた。

その力は、魔力の補助。

俺は、右手に集めた魔力を壁にめり込んでいるムカデ野郎に向けて放つ。

醜い悲鳴が上がった。

「あ、なるほど」

どうやら「僧侶」の力は、魔力を増やすというよりも強化する補正を持つらしい。

俺は納得して、「僧侶」の力を解く。

様子を窺っていると、ムカデ男はフラフラとこちらに向かってきていた。
これだけやって、まだ致命打は受けていないようだ。
「まったく、傷つくぜ？」
ある程度のことは試したし、わかったことも多い。
だから、もう終わらせよう。
俺は飛びあがり、ムカデ男の頭を掴んで、そのまま逆立ちの状態になる。
背中から翼を生やし、勢いをつけて、
「よっ、と」
擬音で表すと、ゴキゴキ……ブチッ！ってな具合。
俺はムカデ男の首をねじ切った。
やれやれと息を吐き、随分待たせてしまった部長たちに目を向ける。
何故かみんな、視線を合わせてくれない。
「んだよ？命を確実に奪うには、効率的なヤリ方だぜ？」
部長は深いため息を吐いた。
「まぁトドメの刺し方はともかく、お疲れ様。あなたの実力はだいたい分かったわ」
「はぁん、そうかよ」

おそらく評価は可もなく不可もなく、って感じだろう。
やはり俺の弱みは実戦によって、より顕著に浮彫りになってしまった。
分かっていたことだが、ここまでとはな。
俺の力には、致命的に決定力が欠けている。
俺には、部長や姫島先輩のような馬鹿魔力も無けりゃ、魔力を扱う才能すら無い。ましてや祐斗のように、特殊な神器を持っているわけでもない。
ないない尽くしが、俺の現状だ。
なら諦めるか？
ハッ、馬鹿こくな。弱気の虫なんざに居場所はねぇ。
俺は、強くなる。

それが、悪魔になって初めての実戦。
決意を新たにして足を踏み出していく、なんて言うとひたらすらクセェけど、実際そんな感じだった。
そして、また何日か経つと、我らが駒王学園の一学期が終業した。
高校一年目の一学期。
まさしく激動の日々であった。
入学した頃とは、いろんなものが変わってしまっていた。つーか人間すらやめることになるとは、流石に予想がつかなかった。
何だか、笑えてきてしまう。
「どうしたんだい薫？」
含み笑いを漏らす俺に、祐斗が話しかけてくる。

「いや、なんでもない」

雑談もそこそこに、俺たちは部室へと向かった。
手には、帰りに配られた通信簿を掴んでいる。
部長が、成績を確認するから提出しろ、とかほざきやがったのだ。
テメェは俺のお袋かっ！

そして、
部室に近づいた時、
俺と祐斗はあることに気がつく。

「……これは、結界！」

「んで、気配は？……ご同族だなぁ」

同時に駆けだし、部室に飛び込む。
扉が弾ける。
ソファには、来客が。
こいつが気配の正体？

そうして。
再び、地獄の釜が開く。
あぁ、本当によ。
認めるよ、素直に思ったね。

やられたぜ。

あの時に、身体に奔っていた痛みと混乱、激情が想起する。
そうさ俺は知っていた筈なんだ。
過去というものは、

何度だって蘇る。

「やぁ、君が私の可愛い心臓喰い（ハート・イーター）を殺した下手人かね？」

そいつの口から出た名前に息を呑む。

そいつは、その名は……！

硬直する俺を見かねた姫島先輩が、口を開いた。

「紹介するわ、薫くん。こちらは旧72柱が一角。プールソン家次期当主、ヴェイトリックス・プールソン様です」

そして部長が言葉を継ぎ、口を開く。

「人間だったあなたを殺した、あのはぐれ悪魔の〝主〟よ」

ハッ、説明どうも。

最高に笑えるぜ。

第9話「俺ってそんなに単細胞に見える？」

姫島朱乃は、遊佐薫を警戒している。

突然の理不尽によって命を奪われたことは同情しよう。

人として懸命に生き抜いた果てに、悪魔としての生を強要されたことも、見方によっては彼の生きざまを侮辱したに等しいことなのかもしれない。

だからある程度、彼がリアスに対して多少の反感を抱くことは予想できていた。

しかしまさか、あれほど怒り吼え猛るとは思わなかった。

薫は悪魔として転生した次の日、呼び出された部室でその激情を発露させた。

見たこともないような感情の放流に、息を呑んだことを朱乃は覚えている。

リアスに向けられる圧倒的な拒絶。

お前を認めないという絶対の否認。

友人として、眷族としてリアスの傍に寄り添ってきた朱乃にとって、それは許しがたい侮辱の数々だった。

この男は手に負えない。

放逐するか、処分した方が良い。

朱乃の一番冷静な部分がそう判断を下していた。

この〝遊佐薫〟は普通ではない。

ありていに言えば異常だ。

リアスにとって、マイナスにしかならないだろう。
始末するとなれば自分がやらねばなるまい。リアスは良くも悪くも眷族に対して情愛深い。数日間の仲とはいえ、手にかけるには負担が多いだろう。

朱乃は冷たい覚悟を決めていた。

しかし、朱乃の予想に反してリアスは薫を受け入れた。
薫が発する反感も否認も、致命的な歪さや危うさも、全てまとめて抱きしめた。

リアスは、王として器をもって〝遊佐薫〟という劇物を受け入れて見せた。

やや根拠のない、ある種〝甘さ〟とも言えるリアスの情愛深さに、しっかりとした芯のようなものが通った気がした。
自らの王がまた一つ強くなった。
明確な成長である。
それは喜ばしいことの筈だ。
しかし朱乃は、手放しに喜ぶことができなかった。

遊佐薫は、その圧倒的なまでの意思力、人格、個性、によって周囲を問答無用に引き摺り回す。

朱乃は遊佐薫を表現しようとすると幼い頃に見た、嵐で氾濫した河川を思いだす。荒れ狂う濁流はさだめた進路を迷うことなく突き進み、障害の全てを薙ぎ払う。

そんなものが引き起こす変化をただ受け入れて良いものか？

朱乃の懸念はそういったものだった。

リアスのことは信頼している。
しかし、遊佐薫を御しきれるかと言えば、話しは別だ。けして楽観視はできない。
リアスは薫を自らの眷族として情を傾け始めた。祐斗にいたっては薫が人間だった頃から友情を育んでいたらしい。
ならば、自分だけでも薫を見極め続けなければ。
悪魔として着実に力をつけていく薫を見ながら、その朱乃の思いは強くなっていった。

そして、日常に異変が起きた。

人間だった薫を死に追いやったはぐれ悪魔。心臓喰い（ハート・イーター）の主が、オカルト研究部を訪ねてきたのだ。

現在、部室にはグレモリー家の者でない悪魔が存在していた。
ヴェイトリックス・プールソンはソファにゆったりと腰掛けている。
見かけは二十代半ば程の優男だ。
深緑色の髪の毛を撫でつけている。
充分に整った顔には優しげな微笑を張り付けて、物腰も穏やかだ。
しかし、目だけが違った。
笑みの形に歪んだ瞼の奥には、まるで発情期のケダモノのようにギラギラとした瞳が光っている。
何もこの状況に興奮しているわけではない。
旧７２柱の一角に名を連ねる純潔の悪魔。プールソン家次期当主である彼の、抑えきれない獣性が瞳から漏れだしているというだけのこと。

朱乃はツンと鼻にくる臭いに眉をひそめた。

香水で隠しているが、染み込んだそれは消せていない。
血と、生臭い獣の臭い。
それがなんとも気に障るのだ。

朱乃は気を紛らわすように薫に意識を向けた。

薫は部室の壁に寄りかかり、あくびを漏らしている。
不機嫌そうに眉に皺を寄せてはいるが、それはあくまでいつも通りだ。
朱乃はてっきり、我を忘れた薫がヴェイトリックスに飛びかかっていくものと予想していた。
すぐに鎮圧できるように用意もあった。
止めねばなるまい。
ヴェイトリックス・プールソンはその名に恥じぬ力を持った上級悪魔だ。今の薫が突っ掛かれば命はないだろう。
しかし薫は、部室に入ってきた当初こそ動揺を見せていたが、すぐに平静を取り戻した。
以降は口を開くことなくただ黙ってことの成り行きを見守っている。

しかし、その沈黙が何よりも怖い。
いつ爆発するかわからない爆弾と、同じ部屋にいる趣味は朱乃にはない。見れば祐斗も薫に意識を向けているようだった。

「――――それで、いったい何の用かしら？」

ヴェイトリックスの対面に座っていたリアスは口を開いた。

「いやいや、そう構えないでくれよ。今日はお詫びにきたのさ。うちの眷族が迷惑をかけたね」

よくも抜けぬけと。
リアスは心中で毒づいた。
「そう思うなら、眷族の管理くらいしっかりすることね」
「そう言われると汗顔の極みだね。まぁアレはヤンチャな所が可愛くてさ。少し甘やかし過ぎたかな」
ヴェイトリックスは薫に目を向けた。
獰猛な獣の瞳。
「しかし、信じられないなぁ。ただの人間がうちの心臓喰いを打ち破るなんて」
どうせそんなことだろうと思っていた。
それがこの場での本題だった。
ようするにこの男は、その結果が気に入らないのだ。
「あなたも〝大公〟から説明を受けたでしょう。あなたの眷族に致命傷を与えたのは、あくまで人間の青年よ。それ以上でも以下でもないわ」
ヴェイトリックスは、心臓喰いの殺傷を大公を通じて禁止していた。しかし結果的に心臓喰いは消滅した。
薫が、その命を引き換えにそれを成し遂げたのだ。
「もちろん、理解しているさ。しかし納得はしていない。これは気持ちの問題だがね。……それでどうだろう？ひとつ提案したいのだが」
「何かしら？」

「彼、遊佐薫くんと僕の兵士をトレードしないか？」

それは予想もしてなかった言葉。

「お断りよ……！」

間髪言わずにリアスは返した。

冗談ではない。

悪魔の駒にはトレードというシステムが存在している。

互いの王が同意し、同じ駒同士なら下僕を交換できるのだ。

無論、いまやリアスにとって薫は大切な眷族であり、家族だ。

どんな理由があろうと手放す気はない。

ましてやヴェイトリックスがまともな理由を持っている筈がない。

もしトレード　なんてしたら薫はいったいどんな仕打ちを受けるのだろうか。

考えたくもなかった。

「つれないこと言うなよぉ。運命的じゃあないか。心臓喰いを殺しつつも、最後の得物として殺された青年が悪魔として転生したんだ。彼は言うなれば、心臓喰いの忘れ形見のようなものさ。私が所有権を主張してもバチ当たるまい？」

「ふざけないで。あなたの理屈なんて知らないし、興味も無いわ」

「交渉のテーブルにくらい着いてくれよ。俺の兵士は優秀だよ？しかも面白い神器を持っている。たかが元人間とは比べ物にならない逸材だ」

このままでは埒が明かない。
リアスは鼻を鳴らして、挑発的な笑みを浮かべた。
「あなたご自慢の心臓喰いはその〝たかが人間〟に殺されたのよ？どうせあなたの兵士ものその辺の犬にも劣る力しか持ってないのでしょう。嫌よ、そんな外れクジ。掴まされてたまるものですか」
ヒクリ、とヴェイトリックスの頬が歪んだ。身体から魔力の波動が溢れだし、朱乃と祐斗は臨戦態勢に入る。
リアスは叩きつけられる殺気を悠々と流して紅茶を口にしていた。
「……下手に出てりゃ良い気になりやがってっ、この売女がよ……！」
「おかえりはあちらよ豚野郎。さっきから家畜臭いわ、失せなさい」
朱乃は吹き出しそうになった。
こ、これは悪い影響だ。
確実に、薫の口の悪さが伝染している！
朱乃がキッと薫を睨むが、目線は合わなかった。
疑問が浮かぶ。
薫は何を見ているのか。
視線を追うと、ヴェイトリックスの後ろに控えている燕尾服の翁にたどり着いた。おそらく眷族だろう。妙に存在感が薄い。
思えばその男もこの場で一切口を開いていなかった。
結局、その場はお流れとなった。
お互いに殺気立ってしまい、交渉どころではない。というよりも殺気だっていなくても交渉になどならないのだ。

リアスは薫を手放すつもりはない。
そしてヴェイトリックスもまた、薫を諦めないだろう。

ヴェイトリックスとかいう野郎が帰った後、部長は宣言通りに俺の通信簿の提出を求めてきた。
以外に思われるかもしれないが、俺の成績はさほど悪くない。自宅学習はあまりしないが授業を真面目に受けていれば割となんとかなる。
だから、別に通信簿なんざ見られても何とも思わない。
思わないのだが、
これはなんというか、こそばゆい。
思えば、園長先生に通信簿を渡す時も妙に緊張していた気がする。
なんだこの沈黙。
なんで俺はドキドキしてんの？気持ち悪っ！

あぁ、そう言えばガキの頃は母親に褒めて欲しくて、勉強を頑張ってたりしてたわ俺。
だから学期末とかはいつもドキドキしていた。
不安と、微かな期待を抱えて恐る恐る通信簿を開いたものだった。
思ったよりも良ければ自慢げに母親に渡して、悪ければ顔色をうかがいながら渡した。結局あの人は、どんな成績でも俺を叱ることはなかった。
いつだって、微笑んで頭を撫でてくれた。
……それは、今は意味のないゴミクズみたいな記憶だった。

帰る頃にはすっかり日が暮れていた。
駅前には夏休みに入り、浮かれ切った脳みそアッパラパーの学生がたむろしている。
公然といちゃつくカップルだっている。
良いね、うん。青春だ。

そして、俺の隣には祐斗が歩いていた。
まじで空気読め。

なんだお前、何なんだお前は？
護衛のつもりかぶっ飛ばすぞテメー。

「アホか、過保護過ぎる」

「今の君の立場は微妙なんだよ。わかってくれ」

ため息が漏れる。
今日は碌な日じゃない。
なんだか、自分の中では過去にしたことばかり思い出す。

「でも、以外だったね」

「あ？なにがよ」

「ヴェイトリックス・プールソン。君を……殺した悪魔の主だ。薫の仇と言ってもいい。正直、全力で突っかかると思ってた」

「ハッ！俺の仇は心臓喰いだけだ。その仇も人間だった俺が取った。今更どうこう言うつもりはないね。……それに」

「それに？」

「今の俺じゃヴェイトリックスはおろか、あの付き人にすらかなわねぇよ」

「……意外な意見だ。例えかなわなくても挑みかかると思ってた。部長には向かっていったじゃないか」

「俺はリアス部長と殺し合いがしたかったわけじゃない。俺の意思を伝えて、喧嘩をしたかったんだ」

「じゃあ、心臓喰いと戦った時は？人間だった君は、悪魔という怪物と戦った。絶望的な戦力差だ。助けを求めようとは思わなかったのかい？」

「馬鹿こけ。アレこそが命を賭ける価値のある戦いだ。あの糞女は、俺を単なる捕食対象としか見ていなかった。死んでも吠え面かかせてやるって覚悟を決めたね」

実際、死ぬことになったしな。

俺の言葉に、祐斗は足を止めた。

「どうして君は、それだけで命を賭けられる？」

「意地だ。これがなきゃ俺はただのボンクラになる。……むしろそれ以外の理由で、いつ命を賭けるんだ？」

「普通は冗談以外で、命がけなんて口にしないものなんだよ」

「はぁん、つまんねぇ現実を生きてんだな祐斗は。お前にはないのかよ？命を賭けても譲れないもの」

祐斗は黙り込んだ。
そしてめずらしく、強い感情が浮かべた。。
「……そう、だね。あるよ、うん、僕にもあった」
横目で、祐斗の様子をうかがうと、硬く握られた拳が震えていた。
そうだ、これは、
「――――――復讐だ」
それは明確な怒りの感情。
確かに、祐斗はそう言った。
無駄な装飾のない生の感情。
俺は自然と笑いが込み上げた。
「クハッ！良いじゃん復讐。それをやらなきゃテメェの人生始められないならするべきだ。部長とかグダグダ言うかもしんねぇけどよ、好きに突き進みな。復讐によって得られる物も、復讐によって失う物も、全部が全部、復讐を終えてみないとわからねぇもんだ。そうだろう？」
祐斗は何やら驚いたような顔で俺を見ていた。
間抜け面め。
学校のファンが泣くぞ？
「……ッハ、ハハ、アハハハハ！」
そして急に笑い出した。
祐斗の情緒が不安定過ぎてやばい。

つーか前から思ってたけど、こいつの対人能力って外交ばっか上手くて、ちょっと踏みこむとすぐにグダグダになる傾向がある。
ある意味、俺とは別の方向のコミュ障だ。

俺はいつまでもヒーヒー笑っているボケナスに蹴りくれてやり、家に帰った。

「ちょっと、待ってよ、アハハッ」

「うるせぇ、挙動不審者がっ！付いてくんなっ」

ホンット、疲れる一日だった。

そして、襲撃は突然だった。

ヴェイトリックスの部室訪問から数日。
軍人でもあるまいし、いつまでも緊張感を保っていられるほど状況に慣れていない。
俺はその時、自宅で夏休みの宿題をしていた。
大した難易度でもないくせに、物量だけはいっぱしの問題集にイラついて、頭を掻き毟った瞬間、

我が家であるボロアパートが吹き飛んだ。

俺は咄嗟に魔力を行使して障壁を創った。
お構いなしに野外へ吹き飛ばされる。
衝撃を殺しきれず、酷く体を打ちつけた。

「グッ、やってくれんじゃねぇか――――――」

俺は歯を食いしばり、
空に見上げる。

「――――――――――姫島先輩よぉっ!!」

リアス・グレモリーの眷族。
姫島朱乃が、翼を生やしてそこにいた。

第１０話「ギャンブルは下準備が大切」

「あなたはリアスにとって害悪です」

宙に静止した朱乃先輩は、はっきりと口にした。
凍てつくような冷たい視線が、俺を見下ろす。
俺はニヤつく口角を隠しもせずに、嘲笑を返す。

「だったらどうするよ？」

「わたくしも考えましたわ。リアスは情に厚いから、あなたの死は少々刺激が強過ぎる……」

朱乃先輩の手に魔力が集まり、すぐにそれは雷へと変質した。
そういやこの人、『雷の巫女』とかいう痛い二つ名を持ってるんだっけ？
争いの気配に血が熱くなるのを感じた。

姫島先輩が、俺に対して敵意に近い感情を抱いていたことは知っていた。
いつかは争うことになると思っていた。もっともそれが今だと思っていなかったが。

故に、
悪くない気分だ。
否応がなくテンションが高まる。

「だからこそ、プールソン様の提案は、まさに天啓でしたわ」

「ハァ？」

待て待て。

何言ってんだこいつ？

「わかりませんか？あなたがリアスの下僕でなくなれば良い」

「……ハァ？」

そういやあのヴェイトリックスの糞野郎そんなこと言ってたね。

確か駒同士が同じなら、下僕をトレードできるとか、なんかそんなの。論外過ぎてそこらの会話は聞いてすらいなかったわ。

それよりも、糞野郎の後ろに控えていた執事に、俺は意識を割いていた。

「あぁ……うん。で、それがなんスか？」

俺は頭をボリボリと掻いた。

なんと言いますか、どっちらけだ。

「まぁ、貴方のことですから突っぱねるでしょう？だから四肢を引き千切りリボンをつけて、プールソン家に宅配してあげますわ」

朱乃先輩（笑）はそういって、電を俺に飛ばした。

俺はそれを棒立ちで喰らった。

目の中に火花が散り、なすすべもなく倒れ伏す。毎度おなじみ、俺の身体からは焼き肉のような香ばしいニオイがする。勘弁してくれ。

無論、ダメージはあった。

が、致命的にではない。

俺は身体についた煤を払いながら、立ち上がった。

こりゃ決まりだわ。

俺は魔力練り上げて圧縮する。

「――――――もういいや。しらけた」

俺は目の前のオモシロ野郎に一気に肉薄し、魔力弾を叩きつける。
当然のように防がれたが、そんなことはどうでも良い。

はっきり言おう。
こいつだけは必ず吠え面かかすと、そう決めた。

「あら、つれない、」

「うっせぇボケッ！喋んな殺すぞ!!」

言葉を遮り吼える。
無性に苛立つ。
身体を完全な戦闘態勢へと整え、俺は握りかためた拳を振り切る。

そうして戦闘が始まった。
まじでクソッタレな、何の価値も無い闘争だ。
モチベが上がらないこと山の如しである。

いつかの放課後のことだ。
俺の放課後は、基本的に自己の鍛錬に振り当てている。

その日も、祐斗との模擬戦を終えて姫島先輩の魔力運用のレクチャーを受けていた。
身体は疲労していたが、力の入らない弛緩した身体には魔力が良く行き届いた。その感覚がどこか心地よく、気が付いたら俺はまどろんでいた。
部室には西日が差しこみ茜色に染まっていた。
何やら書き物をしている部長のペンの音。その手伝いをしているのか、書類をめくる祐斗。校庭からは運動部の掛け声が微かに聞こえ、姫島先輩の聞きやすい講義が耳をくすぐる。
なんだか妙に穏やかな日のことだった。

「あらあら、お眠ですか？薫くん」

「んあ？……悪い。寝てたわ」

「かまいませんわ。疲れが溜まっているのかもしれませんね。……それにしても」

ふふっ、姫島先輩は悪戯っぽく笑った。

「あなたは、子供のように無邪気に寝るのですね」

「……うるせぇよ」

悪態を吐くも、姫島先輩は笑みを深めるだけだった。

「少しは、私たちに気を許してくれている、と考えても良いですか？」

「あ？」

「寝顔を見せるって、そういうことでしょう？」

「別に。それこそ、ただ疲れてただけさ」

「つれないですね」

そう言って、姫島先輩は口をとがらせた。
俺は鼻をならした。
先輩は何かに迷うように顔を伏せた。
しかしすぐに、真剣な目でまっすぐに俺を見つめた。

「……あなたは、リアスにとって害悪です」

「あぁ、かもな」

「だから――――――――」

だから、と続く言葉が俺にはとても温かく感じたのだ。
その日のことはよく憶えている。

ぶち破ったコンクリート塀に埋もれながら、俺は目を覚ました。

「やば、いま一瞬意識トンでたわ」

頭を振って、立ち上がる。
相変わらず、姫島マンは空を飛びながら俺を見降ろしていた。

「よぉ！随分結果を急ぐじゃねぇか！」

戦況は一方的だった。
俺は距離を詰められず、僅かな反撃と引き換えボロクソにされている。
しかし、だ。
違和感はある。強い違和感だ。
やつは、妙に勝負を急いでいる。
「楽しもうぜ？つか楽しめよコラ！サディストなんだろうがよ、部長に黙って上手く襲撃したんだろ？何か早く帰りたい理由でもあんのか？」
「あまり嬲っては可哀想でしょう？」
「俺の知ってる姫島先輩とは思えない台詞だぜ。発言に統一性もない。俺の手足をバラして献上するんだろ？結局最後はいたぶるんじゃねぇか」
返答は雷となって降り注ぐ。
しかしそれは俺には当たらず、不自然に逸れた。
「っ!?」
「なぁに驚いてんだ？前にした模擬戦でも俺はこの手を使ったぜ。ムカつくことにすぐに対策されて黒焦げにされたがよ」
再び雷が落ち散る。
「だから、無駄だって」
さきほどと同じように雷は逸れる。
別に難しいことじゃない。魔力を銅線のように伸ばし避雷針に見

立てているだけだ。電気はすべて地面に逃げている。

これで確信は得られた。

あいつと違って、俺は結果を急ぐ必要が無い。

なんなら、このままこうやって突っ立っておこうか。

「てめぇよ、器用なのは認めっけど。慣れないことはするもんじゃないぜ？」

「あら、どういう意味でしょう？」

あぁ、もう駄目だ。

付き合いきれねぇ。

「てめぇ、姫島先輩じゃねぇだろ？」

見上げるた先にいる、

姫島朱乃の、姿をしているどっかのボケナスへ告げる。

「風上に浮かんでんじゃねぇ、クセェんだよ。血と獣のニオイで鼻が曲がりそうなんだ。憶えがあるぜこいつには。なんせ俺を殺した糞女も同じニオイをさせていた！」

そいつは黙ったまま動かない。

「本物の姫島先輩の電撃はなぁ！まじで身体の末端が炭化する洒落にならねぇもんなんだよ！それが何だテメェの雷は？静電気かなんかですかボケェ！痛くも痒くもねぇんだよアホがっ!!」

根拠はまだまだある。
だけど、決定的なのは、
『だから、その時が来てしまったら、私があなたを殺します。私の全力を持って』
いつか俺を射抜いた言葉を思い出す。
「それにあの人はなぁ、俺のことをまっすぐ見てくれるんだよ！俺ことが気に入らねぇって、堂々と睨んでくるんだよ！堂々と挑んでくれるんだよ!!お前みたいな陰険な目はしてねぇんだよっ!!!」
俺は言いきり、こみ上げた血痰を吐きだす。
呼吸が荒い。
俺は、俺の思った以上に激昂していた。
なぜ、俺はこんなに怒っているんだ？
「これは勘だがよ。てめぇ部室で、プールソンの野郎と一緒にいたジジイだろ？わかるんだよ。てめぇの目はそっくりだ。一目みてピンと来たね。俺の知ってる最高のクズ野郎とそっくりだ。人を貶めて、その顔を眺めて悦に浸るゲスの目だ……！」
「――――――――まったく、面白くない獲物だなぁぁあ」
声が、ガラリと変わる。
しゃがれた、翁の声を姫島先輩が吐き出す。
控えめに言っても、くそきめぇ。

「我が主、ヴェイトリックス・プールソン様の意に添わない糞餓鬼がよ。もういい。ここで死ねよ」

高い、硝子の割れるような音が響く。

姫島先輩をかたどっていた何かは割れて、燕尾服の翁が現れる。

予感的中である。

まぁ、こういう勘は外したことがないのだが。

そしてこの能力は、

「神器か」

「ムカつくほど察しの良い餓鬼なぁ。そうだ、うちの『兵士』が持ってたもんでよ。ブッ殺して持ってきたんよ」

「そいつはまた、過激ですこと」

「しょせん人間からの転生悪魔だ。どうでもええよ。まぁ能力は面白いし役に立つ。こいつは姿だけでなく魔力の気配なんかも偽装してくれる。だから察知されずにグレモリーの領地に入り込めた」

心臓喰いの事件以来、この町の侵入者に対する警戒はかなり強い。シトリーとかいう悪魔と共同で結界が貼られている。

しかしその結界も、張った本人に化けられては作動しないようだ。

神器ってもんは、本当になんでもありだ。争いのバランスを壊してしまう。

まさしくバランス・ブレイクである。

「俺はよ。最初からてめぇを警戒してたぜ。ヴェイトリックスのボンボンみたいな自己中なクズは行動の先が見える。欲望ばっか丸出しでよ、結局たいして頭が回らねぇんだ。けどお前は違う。陰険で、姑息で、陰謀大好き、だろ？」

「姫島とかいう小娘がお前を警戒しているのはすぐにわかった。利用できると思ったがね。……お前、仲間に襲撃されたらもう少し動揺しろよ。なぁに嬉しそうに口角上げてんだ人でなし」

「ッハ！ご期待に添えなくて悪かったよ。グレモリーの眷族はな、お互い殺す勢いでぶつかって結束を深めるんだ、覚えときな」

脳内で粘着女がギャーギャー文句言ってるが知らん。黙ってろ役立たず。

「それで、種の割れた茶番だが。まだ続けるのか？」

「ホッホ、むしろこれからが本番だよ。これで心おきなく自分の戦い方を使える」

「随分、時間かけちまってるが良いのか？これだけ馬鹿騒ぎすればグレモリーの連中も気づくんじゃね？」

「まぁ一応ジャミングもかけているし。その辺は賭けですねぇ。お若いの、ギャンブルは好きかい？」

「あぁ、好きだね。特に勝つと決まってるギャンブルはな」

「フイたな糞餓鬼」

「ホラじゃねぇよ糞爺」

「ゴアヒ・ウコバク、『女王』だ」

「遊佐薫だ、『兵士』だ」

そして、お互い一気に接近する。
第二ラウンド――――――――――開始。

ゴアヒと名乗った糞ジジイは中距離を主体とした戦いが得意なようだ。
特徴的なのは、
「ゲェエアア」
ゴアヒは勢いよく液体を吐きだす。
放射状に広がるそれを、なんとか避けるが一部が手にかかる。
気味の悪い音を立てて、腕の肉を溶けた。
苦痛の声を噛み殺す。
こいつはっ、
「酸か⁉」
「ご名答！」
こいつは溶解液のような物を吐きだしてくる。
まじてめぇの体内どうなってんの？気持ち悪過ぎる。
ていうか相手は『女王』だってさ。いや予想はしてたけどさ。
相変わらず俺の人生ハードモードである。
「ヒヒヒ」
糞ジジイの全身が、頭から水を被ったように濡れだす。
したたる雫が地面を焦がした。

俺は心底げんなりした。

「ガマの油かよ、ゲテモノにも程がある。頼むから死んでくれ」

「私に敵対するなら、殺すと宣言したまえよ」

「大きなお世話だ！」

生成した魔力流を叩きつける。

簡単に弾かれる。

「ショボイ力だ。こんなんじゃどうにもならないぞぉ？」

言われてしまった。

決定力不足はこの場では死活問題だ。

仕方がない、と覚悟を決める。

俺は魔力で身体を強化して、一気に飛びかかった。

「馬鹿がっ！溶かしてくれる！」

糞ジジイは腕を振り下ろすと大量の酸がこちらに飛んでくる。

「っぐぅおおお！」

脱いだ上着を酸にぶつけて直撃は避ける。

「無駄だ！素手で私に触れられるわけがっ、」

「フラグ乙！」

俺は叫び、歯を食いしばる。

酸に包まれた自分に無手で攻撃するはずがないという、意識の間隙。
俺は渾身の右で糞ジジイの顎を突き上げた。
「ッゴ！」
ジジイの眼球がブルリと揺れ、一瞬だけ意識を奪う。
それで充分だ。
俺は一歩下がり、身体を捻る。
振るった右腕を引き、左腕を突きだす。
右足で踏ん張り、
左足を、
「くたっ――――」
振り切る！
「――――ばれぇっ！」
死にさらせと振るった渾身のハイキック。
弧をえがいた俺の足刀は糞ジジイの顎を横合いからぶち抜く。
ゴキッ！と景気の良い音。
もらった……！
骨を砕く感触。
「ひぇめぇ！くひょ餓鬼がぁ！」
ゴアヒはしぶとく腕を振る。
酸が飛び散るが、俺はすでにバックステップで距離を取っている。

「ハァ？なんだって？」

俺は聞こえなーいとジェスチャー付きで嘲笑う。

正直、かなりすっきりした。

ただ、

代償はそれなりだ。

振るった拳は肉が溶け切り、骨を露出させていた。

左足も同様の有様だ。

それに気付いたのか、糞ジジイは下卑た笑みを浮かべる。

口にたまった血を吐きだすと、顎の骨を手の平で矯正した。

「そん、な傷で、戦えん、のかよぉお」

「今の二発は、まぁ俺の我がままっつーか、意地だ。正直勝ち負けにあんま関係ねぇよ」

「……なんだと？」

「どうしょうもねぇ戦況に置かれるのは、俺の人生でもそう珍しいことじゃねぇ。ちょっと前は、はぐれ悪魔に襲われたし……六年前にだって絶望しか感じない戦いを強いられた」

俺はおもむろに翼を広げる。

蝙蝠にも似た悪魔の翼。

見てくれはちょっとアレだが、まぁ俺には上等な代物だ。

きっと俺を高みへと導いてくれる。

「そんな時、俺はどうしたと思う？どうやって勝利をもぎ取った思う？」

「てめぇ、どうす、る、つもりだぁあ」

喋りにくそうだなぁ。クゥソジジィー。

けど、俺の我がままの効果はそれだけじゃねぇ。

「決まってんだろ、それはっ」

俺は翼を羽ばたかせて、一気にっ、空へっ！

「逃げるんだよぉ間抜けがぁあああああああああ！」

いざさらばボケジジイ。一生地面に這いつくばってろアホウがぁ！

空へ昇る一瞬、ジジイのポカーンとした顔が目に入った。

圧・倒・的・快・感！

出し抜いてやったぜヒャッホー。

俺は空を全力で駆ける。

「ま、待てっ、糞餓鬼！」

ゴアヒは翼を広げて俺を追おうとするが、その飛行はフラフラと頼りない。

ボケが。俺がいったい何のために顎を砕いたと思ってる。

悪魔だって、あくまで生物だ（悪魔だけにな）。脳を揺らせば平衡感覚くらいは狂う。

「……ハハッ。これで距離は稼いだ」

だが、
今だ俺の『勝ち』は遠かった。
だが、必ずたどり着く。
どんなにその歩みが遅くとも、けして足を止めないのが俺の戦いだ。

空中戦はそう長く続かなかった。
経験の差というべきか、俺はすぐにゴアヒに追いつかれた。
戦いとも言えない攻防が続き、俺の身体はあちこちが焼け爛れている。
俺は必死に距離をとって、奴と向き合う。

「ホント、よくやったほうだよ糞餓鬼」

もうだいぶ顎の調子は良いようだ。
悪魔の回復力はホントにチートである。まぁ、例外は色々あるらしいがな。

自分の優勢に気を良くしたのか、何やら話しかけてきた。
間が抜けてるぜ糞ジジイ。
俺の目的だってすでに達成しているんだぜ。

「どうしたよ？仲間の所にでも飛ぶつもりだったんじゃないのか？」

「何言ってんのお前？つーか俺、あいつらの家なんざ知らねぇし」

「だったら時間稼ぎか？無駄だぜぇ。賭けとは言ったがよ、私のジャミングは完璧だ。お前は希望を持ってるだろうが、仲間は来ねぇよ！
私が勝負を急いでいたのは、汚らわしい人間界の空気が不快だったか

らだ」

「そいつはごくろうなことで。つーかテメェごときを相手にするのに、あいつらの助けなんて借りるかよ」

いつ来るかもわからねぇ助けなんざ、最初からあてにしていない。

「なぁ、おい。テメェよぉ。テメェの勝利条件はなんだ？」

今度はこちらから聞いてやる。

「そうさね。お前を殺すことかな？より残酷に」

馬鹿が。

お話にならない。

「それじゃ足りねぇよド低能。テメェは自分の勝利に必要な絶対条件を自覚してない」

何年生きてるか知らねぇけど、現状をちゃんと把握できるようになってから出直してこい。

ゴアヒは苛立ったように眉を寄せる。

「本当に、本当に気に障る餓鬼だ。もう良い、死ねよ」

「死なねぇ。俺の勝ちだ」

向かってくるゴアヒに一気に突っ込む。

「馬鹿がっ！」

「馬鹿はテメェだ！」

これまでの戦いで分からなかったか？

俺の最終コマンドは、基本的に『捨て身タックル』だ！

噴きかけられる酸をまともに受ける。

最低限、腕でガードする。目に入らなきゃそれでいい。

「グゥウアアアエアアアアアアアアア！」

吼えて猛り狂え。

これは痛みを受けた悲鳴ではない。

反撃への咆哮だ。

条件はそろった。

いくら奇をてらおうが、いくら策を練ろうが、最後に頼りになるのは、人間だった頃から変わらない。

いつものアレ。

気合いと根性と、愛すべき……やせ我慢！

ゴアヒが驚愕したように目を見開く。

本当に、間が抜けてるぜ、ジジイ。

「ぁ、つ、つか、掴まへぇたぁ」

溶けかけた唇を歪め、

ニタリと笑う。

ゴアヒの首を鷲掴みにする。当然、体表の酸に焼かれるが、まぁ知らん。

自分の翼をジジイの翼に絡ませる。

「よぉお、糞ジジイィ。ギャンブルは好きか？」

そして、揚力を失った俺たちは、地面へと堕ちて行く。

「クソォガキガアァアァアァアァアアアアアアアアアア！」

「堕チィロォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ゴヒアの叫びと俺の叫びが重なる。
もはや言葉にすらなってないかもしれない。
脳内麻薬が異常に分泌されているのがわかる。
負ける気が、しなかった。

空中でグルグルと俺たちは回転する。
地面はみるみる内に近づいてきていた。

さぁ、どっちが先に地面に付くかなぁ？
どっちが下敷きになる?
下敷きにならなかったとしても、その衝撃に耐えられるかな？

「ナァアアメルナァアアアアアアアア！」

地面に追突する寸前――――――――――――――――。

地面に叩きつけられたのは、

――――――――――――地面に魔方陣が浮かび上がる。

ゴアヒだ！

俺は歯を食いしばる。
しかし、予想した衝撃はない。
ゴアヒの術なのだろう。
突如出現した魔方陣が位置エネルギーを殺しきった。

俺たちは地面を転がる。
そしてすぐに体勢を立て直したのも、ゴアヒだった。

「ざまぁああみろおお!!あんな方法でっ！この私を殺そうだなどと、甘いんだよぉおお！」

俺に覆いかぶさり叫ぶ糞ジジイ。もはや体面も糞も無い必死さだ。
つーか、すげぇ酸が垂れてきている。地味にきつい。

「まだ、ギャンブルは終わってねぇよ早漏」

俺の頭を叩き割ろうと拳を振り上げるゴアヒ。
しかしその動きはぴたりと止まる。
俺がポケットから抜いたナイフを、奴の眼球に突きつけているからだ。

「良い子だ。ただのナイフと思うなよ。魔力で強化くらいはしてるぜ？」

「だから、なんだ？目を抉られようが、その後でお前の頭蓋を割ってやる！」

「いいや、できないね。さっき聞いたよな？テメェの勝利条件はなん

だって」

「お前を殺すっ、それだけだ！」

「それじゃあ足りねぇっつってんだろボケがっ！正しくは『損失なく、俺を殺す』それがテメェの条件だ！」

ゴアヒが息を呑む。

「俺は悪魔の身体がどれくらいの強度で、どれくらいの再生力を持つかをちゃんと調べたぜ！ただ一つ気になってよ。悪魔の力は完全に損失した部分も再生してくれるのか？」

少し前の事だ。

俺はそのことが知りたくて、自分の目を抉ろうとした。

結果的に近くにいた部長に殺す勢いで殴られて止められてしまったが。しかし答えも教えてくれた。

「答えは『否』だとよぉ！個人差はあるが、肉体の欠損は悪魔にとっても重い話しらしいなぁ！どうだよ？テメェは悪魔の中でも強い再生力とか待ってたりすんのかよ？目玉の一つくらいへっちゃらですかぁ？」

「き、貴様……！」

「あ～あ、情けない。つい数か月前に人間から転生したばかりの下級悪魔に、目玉を奪われたどのツラ下げて主に会うんだろ？俺だったら割腹自殺するね！」

「な、舐めるなよ貴様！貴様などっ」

「お前の負けだよ。俺の勝利条件はテメェを打ち倒すことじゃない。『生き残る』ことだ。その為ならどんな犠牲も、賭けにだって平気で乗る」

「いいやまだだ！私が犠牲を覚悟すれば！」

「無理だね！落下死をまぬがれて一番の興奮状態だったあの瞬間でもっ、お前は振り上げた拳を止めてしまった！目を抉られるのは割に合わないと判断してしまったからだっ！」

ゴアヒの荒い息が辺りを覆う。
しかし、覚悟を決めるように、意識して深呼吸を始めた。
冷静になる為に。
俺に呑まれている状況を打開する為に。

させるかよ、阿呆が。
良いことを教えてやるよ

「それとな、お前さ。ここがどこだか分かってる？」

「……は？」

「この俺様がよ。何も考えずに空を飛びまわったと思ってんのか？」

そうだ。
俺は仲間に助けを乞うために、時間稼ぐために飛んだのではない。
すべては勝ち目を引くためだ。

「ここ、教会の敷地内だぜ？」

ゴアヒが息を呑むのがわかった。

「よぉ、さっきから息苦しかったろ？平静でいられなかったろ？理由は簡単。ここは神の土地だ。俺たち悪魔の侵入は許されていない。ほら目を横に向けてみろよ」

そこには、朽ちてはいるが立派な教会があり、その頂には月夜に照らされた十字架が光っていた。

いつぞや行くに行けなかった教会に、俺はたどり着いた！

「ひっ!?」

「わかったかよ？ほら早く決めろよ。馬鹿みたいに悩んでいる今この瞬間にもっ！天使の射る『光の槍』が飛んでくるかもなぁ!!幸い、俺の場合は、お前は覆いかぶさってくれてるから、無事だったりして。いや仲良く一緒に串刺しかな？まぁそこらへんはホラ、神にでも祈っておくよ」

「き、貴様は、狂っている！」

「安くみんじゃねぇ！そんな簡単に狂ってたまるか！必死で耐えてる。必死で考えてる。必死に生きているんだ!!さぁ選べ！俺を殺すして片目を失うかっ？それともこの場はケツまくって逃げるかっ？好きにしろ！ただし時間はねぇぞ。神様が俺たちを見下ろしている!!」

俺の叫びが残響を残して辺りに響いた。

辺りを痛いほどの静寂を支配する。

やがて、

ゴアヒは俺の上から退いて、フラフラと去っていった。
身体中の力が抜け、
肺の中身を全て吐きだすようなため息が漏れる。
「……俺の、俺の勝ちだ」
小さな呟き。
それでも満足できなくて俺は叫んだ。
「俺のっ！勝ちだぁあああ！」
爆笑である。
腹を抱えて大笑いをした。
身体中痛い。
身体中の肉が溶けているんだ当たり前である。
それでも俺は生きている。
生きている！
種も仕掛けもあるギャンブルに俺は勝った！
この教会が閉鎖され、神の監視領域からも外れていることを俺は知っていた。
すこし前の休日に、俺が教会に関わったのをキッカケにリアス部長が調べた上げていたのだ。
つまり、この教会には光の槍が降って来ないという確信が、俺には最初からあった。
貧乏性だからよ。俺は、勝てる賭けしかしねぇんだよ。
ざまぁみろと、一通り笑って俺は携帯を取り出す。
今だけは買ってよかったと思う。

さすがにこのままぶっ倒れていたら衰弱死しそうだ。
教会の聖なる波動が洒落にならなくてヤバイ。
小さい液晶にある『粘着女』の名前を選択する。
なんとなく助けを呼ぶのは癪ではある。
いや、これは助けではない。今夜の報告だ。
報告をするためには、身体が万全でなければならない。
だから治療は必要だ、うん。
俺はグダグダと理論武装して、通話ボタンを押した。

全く、ホントに……長い夜だった。

――――――プルルルルル、ガチャ

『はい、リアスグレモリーです』

「あ、部長？俺で、」

『申しわけありません。ただいま所用により電話に出ることができません。発信音の後にお名前とご用件を、』

まごうことなく、留守電である。本当にどうもありがとうございました。

「てっめぇえええええええええええ！」

危うく携帯を叩き壊しそうになった俺は悪くない。

「ほんっとに、ほんっっとに！使えねぇ女だなテメェはよぉ!!」

俺は叫んだ。
粘着女、肝心な時に使えない。マジで死すべし。